
碁神の作り方(ヒカルの碁)

戒辰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

暮神の作り方（ヒカルの暮）

【Nコード】

N0202F

【作者名】

戒辰

【あらすじ】

己の人生を生き抜いたヒカル。死の間際、嘗ての師である藤原佐為との二度目の出会いがあった。そして、死の次に始まる新しい人生。二人の始まりの場所まで戻されたヒカルは戸惑いながらも二度目の人生を歩む。

1話（前書き）

この作品は私の自己満足の為に書いています。

よって下記の事が許容出来ない方は読まない方が懸命かと思えます。

- ・オリジナルキャラ
- ・性別逆転
- ・本編改変
- ・性格改変
- ・ヒカル無敵
- などなど

追記としましてはBL要素はまったくないです。

一部キャラクターを女性化するわけですから、そういう風にみえるかもしれませんが、作者としてはBLとして書くつもりは全くありません。

追記：「塊辰」と私は同一人物です。詳しくは後書きをヨロシクおねがいします。

1話

ここは、どこだろう

彼の頭の中にそんな言葉がよぎる。

どこかで見た事のあるような風景。

しかし、同時に絶対にこの世には存在しないであろう風景。

なぜなら、ここには何も無い。

天上がなく、空がない。

床がなく、地面がない。

視界は薄い霧もやのような物で閉ざされ、1m先もみえないようなありさまだ。

そんな奇天烈な場所はこの世の何処にも存在しないだろう。

故に彼はこう思った。

ああ、これは、いつもの夢だ

足元を眺めながらそう思った。

彼のもっとも近い者が去ってから、たまに見る夢幻の世界。

近き者から意思を引き継いだ場所。

唯一、己の師に合える場所。

この世界に入ると、必ず自分は若かりし頃の姿となり、あの頃の服装で再現される。

これには、失笑を零した事もあった。

それ程に自分は後悔しているのかと。それ程に佐為が恋しいのかと。

なんと自分を問い詰めたか解らない。

いつも答えは一緒だった。

ああ、後悔している。何故気付いてやれなかったのか。何故己を優先させてしまったのか。
ああ、恋しいとも、己の父であり、兄であり、友であり。師である。恋しいに決まっている。

いつもの思考ループを繰り返す。結局、後悔と愛しさが残るのだ。この夢は、己にとって贖罪だった。
忘れるな、己の犯した罪の重さを。
忘れるな、己が消した者の重さを。

だが同時に希望だった。
虚像でも会える嬉しさ。
紛い物でも微笑んでくれる、その暖かさ。

もう望んでも得られない物であるが故に、この夢は待ちどろしくも辛いものだった。

だが、今回の夢は一風変わっているようだ。
いつもなら、ここに来れば必ず眼の前に現れる師が出てこない。クルリと体ごと回転させて回りを見回してみる。

.....っ!?

己の背後に師がいた。
だが、何故だろう。

泣いている。とても悲しそうに微笑みながら泣いている。
この夢で師は一度も悲しみを見せた事はなかった。
彼が、本因坊を奪取した時。
彼が、ライバルに完勝した時。

彼が、佐為の名を頂いた時。
彼が、幼馴染と結婚した時。

なにより、彼が師の志を真に受け継いだ、その瞬間。

すべてに意味があり、ここに出てくる師は全てに微笑みを返してくれた。

それが何故、これほどまでの悲しみを乗せて泣いているのか……。

どうしたんだ？

佐為が泣くなんて。見た事なかった。

こんなに、綺麗に泣くんだな。

問いかけながらも、そんな事を思ってしまう。

今でこそ思うが、佐為は美人だ。あの頃の自分は、幼すぎて解らなかつたけれど、本当に綺麗な人だ。

姿も美しければ、心もまた美しい。

その彼が泣いている。

それは、哀愁と相まって佐為の姿をより引き立てている。

……………。

問いには答えず。

ただ、自分を見ながら悲しげに眼を細めて、涙を流し続けている。
何がなんだか解らないな。

何か、悲しい事があったのか？

己の虚構の存在ではないだろう。

自分は、佐為のこんな姿を望んでいないのだから。

………はい。

僅かに驚いた。

初めて、この夢で佐為の声を聞いたのだ。

いつも微笑むばかりだった佐為の声を。

彼の声を聞くのは何十年振りだろうか？

心が包まれるような、安心感。少年の頃聞いていた、心地良い響きが耳を打つ。

そっか。

それだけを、呟き。

自分の頬を熱が下るのを感じた。

感動している。待ち望んでいたその声を聞けて。

切望している。自分の名を呼んでくれ。と。

佐為が自分にどれほど重要だったかを、この歳でまた再確認した。

ヒカル。

ああ。

なんだよ。やっぱオレってダメダメだな。

これだけで涙が止まらない。

一粒だけだった涙は、涙腺が決壊したかのように流れ出す

それでも、場のせいだろうか？

嗚咽をあげたりはせず、静かな涙が流れる。

………なに？

お互い涙を拭きもせず、なんだか可笑しい場面だな。

そんな事を思いながらも問う。
佐為が話しているんだから。当然だよな。

ヒカルが、死んでしまう。

驚きは、なかった。

ああ、そうか。

そう静かに納得した。

だから泣いているのか。

そうか。オレ死んじゃうのか。

うん。後悔は、無い事もない。

と言うか有る。

生きている限り、後悔など山のように出来てくる。

だけど、オレはこれでいいのかもしれない。

ヒカル！！ 死んでしまうのですよ……………

なんだか、怒ってるみたいだ。

それに、とても悲しんでる。

力の限り叱咤しながらも、避けられない死に悲しんでくれている。

なんだか嬉しいな。

今まで佐為に対する罪悪感があったけど、佐為はまったく恨んでない。

はは、やっぱり嬉しい。

うん。寿命だよ。

そうだ、寿命だろう。

もう大分生きてからな。

佐為が居なくなってから何年たったと思ってるんだ？

……っ。

綺麗な顔がまた悲しみに塗り固められていく。

少し悲しいけどね。

オレは一生懸命、生きたよ。

佐為に並べるように、佐為を超えられるように。

頑張った。

うん。後悔は少しあるけどさ、良い人生だったよ。

精一杯の微笑みを返す。

お互い涙で濡れてるから、決まらないけどさ。

佐為が笑ってくれたらいいなと思って。

あれを。

少し微笑みながら、そう言って佐為が足元の一点を指す。

その途端、霧は消えて水鏡のようになり、和風の部屋が映った。

佐為から目を離し、そこを見つめてみると

なんだ、オレの部屋じゃんか。

自分の部屋だ。

そこに沢山の人が居る。

あかり、三谷、和谷、伊角さん、名瀬、倉田さん、天野さん、筒井先輩に加賀までいる、他にも俺の子供達と孫。それにプロ棋士が数名、弟子は全員いるってあたりまえか。皆、鬼気迫るって感じの

表情だ。

バンツって障子の音と一緒に今、塔矢が来た。

こいつは、歳くっても回りを気にしない奴だな。まったく成長しやがらない。

まあ、そこが塔矢の塔矢たる所以かもしれないけどな。

「ふざけるなー！ー！ー！！！」

はは。やっぱり変わらない。

第一声がそれかよ。

塔矢ここに極まれり。だな。

小学校の頃から全く変わってない。

その志も、意思の強さも、全てを疎ませるようなその覇気も、ついでにおかつぱ頭も。何もかもが変わらない。

あいつは結局、初めから大物だったって事かな？

ふざけてなんか、いねえよ。

そうだ、ふざけてなんかいない。

これは、来たるべくして来た事だからな。

自分の言葉が伝わったのか、拳を握り締めてワナワナと震えている。

それを、あかりと和谷が落ち着けと宥めてる。

まったく、いつまでも周りに迷惑かけんなよな。

「ふざけるな。」

こんどは、咳くような小さな声だった。

意外な事に、塔矢が泣いている。

今日は誰かを泣かせてばかりのようだ。

しかもレアな人ばかり。

「僕は……………」

ああ、言つな。

しかたが無いからな。

「僕は、この先……………」

だから言つなつて、未練がまた出来るだろ？

「一体、誰と、打てばいいん……………」だ。」

あああ。言っちゃったよコイツ。

確かにさ、俺たちとタメはる棋士なんて今はいない。
タイトルだって俺とお前で総なめだからな。
でもさ。

もう、次の世代が輝く時なんだぜ？

そつだ、俺の弟子が、お前の弟子が輝く時代だ。

「だが、僕は君以上の棋士を知らない。」

当たり前だ。俺はお前のライバルだぞ？

そつだ。

お前のライバルが最強じゃないわけないだろう？

俺もお前も最強なんだ。

だから俺達は神の一手に極限まで近づけた。

「僕はまだ、君から、タイトルを……奪って、いない。」

あの世で、俺から奪ってみろよ。

でもその時、俺は今以上に強いぜ？

なんせ暮の神様と対局しほうだいだ。

「ぐう……つう……ふざ、け……るな。ふざけるなあっあああああ
ああああああ……！」

泣き崩れるなよ、しかもそのセリフでさ。

まあ、だからさ。

今の内に精々腕をあげておけよ。あの世で嫌ってほど打とうぜ？
お前の探してた真実も見れるからさ。

その言葉を切欠にしたかのように、医師が首を振り、自分の顔に
布が被せられるのを見る。

「つく。ううううあああああああああああああああ
……！」

塔矢の劈くような叫びと、同じように自分の胸に顔を当てて泣き
叫ぶあかり。

他の皆もすすり泣く者、全てを投げ打って泣く者、虚脱したかの
ように呆然と涙を流す者。だけど、こう言っただけで皆が皆、
俺の死を悲しんでくれているのは、少しばかり嬉しい。

あかりに関しては、同時に逝けたらいいな。と思っただけで、
流石に無理だったみたいだ。思ってみれば俺達って大恋愛の末の結

婚だ。あかりは小学生からの恋だったらしいからな、置いて逝く事になって少しだけ悪い気がする。

でも、俺の終り方としては悪くない。

精一杯生き抜いた。

今までの人生に思いを馳せる。

水鏡の中の映像も変わる。

霞が掛かるように消えていき。

霧が晴れるように、佐為との出会いから、今ここに至るまでの人生を写していく。

はは、やっぱり悪くないじゃん。

どう？ 佐為？ 俺の人生。

いつかのように背後に居るであろう佐為に振り向く。

そう、まだ佐為と一緒に居た頃のように。

.....。

笑っていた。

泣きながらも、誇らしげに。

素晴らしい、一局いっせうでしたね。

だろ？

やっと解ったかよ。

佐為はさ、難しく考えすぎんだよな。

普段お気楽なのにさ。

じゃあ、一局打とうぜ。佐為。

あの時打てなかった一局を、もう一度。

ええ。喜んで。新しい一局じんせいを作りましょう。

ああ、今の俺は強いぞ。なんせ塔矢に勝ち越してるくらいだからな。

むう。ヒカル！！私の方が強いんですよ！！

はいはい。それは知ってるって、でも負けないからな。

私が一番ヒカルの事を知ってるんですからね！！負けません！！
それにほら、あの時の一局など、偶然勝てただけでしょう？

え？ あー。あれはさ。うん、俺もミスったと思ったんだけどな、
相手に助けられたな。

ほら、まだまだ甘いんですよ。

む、でも今なら佐為といい勝負できると思っぜ。

それは否定しませんよ。

はは、やった！！じゃあ嫌っちゅうほど打とうな佐為！！

ええ。ヒカル。貴方となら永劫に。

二人が霞みの向こうに消えていく。

童は彼の手を取り、駆け。

青年は、困ったようにしながらも笑顔を絶やさず。

この時、地上に於ける最高の棋士が逝った。
名は、進藤ヒカル

タイトル保持数は実に5つ。本因坊・棋聖・王座・碁聖・十段。

一時期は大三冠おも取得するほどの成績を誇った。

その死は、碁に関わる誰もが惜しみ、嘆いた。

「進化し続ける碁神」とまで言われた彼の名は、歴史に刻み込まれ。

碁の最強の棋士は？ との問いに「本因坊秀策」と「進藤ヒカル」とまで言われるほどとなる。

享年58歳。

現代人としては、早すぎる死であった。

童に戻った現世最高の棋士。

童を最高の頂へ導いた史上最善の棋士。

その道の先には、天上へと続くのか？

否、そこは天上ではなく。始まりの一手の場所へ。

少年と青年が出合った、運命の碁盤の前へと誘われる。

これから始まる、新しい一局。

どのような棋譜になるのかは、まだ未定。

だが、この二人の打つ暮は、どのような形になるにせよ。
誰かの心に響く一局になるだろう。

「私の声が、聞こえているのですか？」

「当たり前だろ？ 佐為！！ 聞こえない訳がないだろ！！！」

1話（後書き）

本当申し訳ない

「塊辰」改め「戒辰」です。

IDとパスをメモして置いたのですが、何故か間違っ
てメモっていたようでログイン出来ない状態です。

なんとも出来ないので新しいIDで始めたいと思
います、前IDは削除依頼をだすつもりな
のです。

なんでメモを間違っ
うのか、自分を信じれないような状態です。

まあ。ううう、ごめんなさい

2話

「うわ、懐かしいなー。」

ヒカルはビルの二階に掛かる「囲碁サロン」の看板を見ながらそんな事を呟いた。

この場所はヒカルにとって忘れられない場所だった。

それもそのはず、終生のライバルとなる塔矢アキラとの初めての対局はここで行われたのだ。

あの一局が自分の未来を切り開いたと言っても過言ではないだろう。

この場所は前世といたらいいのか、自分の死んだ世界ではすでに無くなっていたがゆえに、この場所が存在する事がヒカルは嬉しかった。

「な？ お前も懐かしいだろ？」

感慨深げに眺めた後、ヒカルは振り向きながらそんな事を言った。

「ええ、確かに。この目でもう一度^{ひとたび}ここを見る事が出来るとは。」

声に答えたのはヒカルと同じくらいの年齢だと思われる女の子だった。

腰まで届く漆黒の長髪。

紫紺の瞳。

幼いながらも整った顔立ち。

子供である事を差し引いても、将来かならず美人になる事を約束された人物だった。

その言葉と同時に少女から涙が流れた。

それを隠そうと袖口で目元をを覆い。それでも嬉しげに笑う少女に、いいよりの無い感動をヒカルにあたえた。

ヒカルは黙ってハンカチを少女の顔に宛がって涙を拭いていく。かつてのヒカルなら在り得ないような配慮だが、だてに50歳を超えた人生を歩んではない。

それに、とヒカルは思う。

過去、触れる事すら出来なかった人に触れる。

それは、ヒカルにとって途轍もなく嬉しい事だったのだ。

少女の名前は「彩^{あや}」

彼女との出会いは数日前まで遡る事になる。

あの後、ヒカルは淡い靄の中を佐為を伴って駆けていた。

だがそれは、唐突に終わる事になる。

突然、足元が崩れた。

いや、崩れたと言う表現は適していないかもしれない。

硬質な雲の上を歩いていたら突然、本来の雲のように透過したと言ったらある程度解るだろうか？

足元の靄が無くなり、落下したのだ。

当然ヒカルは慌てるし、佐為の無事を確認するために落下しながらも回りを見回す。

そこで確認したのは佐為も一緒に落下していると言う事実だった。

一瞬、ヒカルは安堵し、そして思考を巡らせる。

これはどう言う事だ？

これから、佐為と嫌と言つほど暮を打つつもりだったのだが。天国とやらには行けないようだ。となると。

もしかして、自分は地獄行き？ うわ。最悪だな。

まあ、佐為も一緒に落ちてるから地獄でも暮は打てるか。

俺にとっては佐為がいればどこでも天国みたいなもんだしな。

などとヒカルの思考はドが付くほどの暮バカな思考にはまっていた。

もっとも、これが現実逃避と言う物なのかもしれないが。

その思考もすぐさま収まる事になる。

ドスンッ！

と自分の落下した音と、その衝撃から思考は正常な物に戻ったのだ。

「いって~~~~~。」

しかし、衝撃はとてもなくキツかった。

背骨が折れるんじゃないかと思うほどの衝撃を背中に感じた。

目が痛みによって霞んでいるほどだ。

「何だつてんだ。」

ヒカルは落下した体勢のまま頭を振る。

焦点の合ってきた目を確認し回りを見回してみても、薄暗く何処にいるのかさっぱりつかめない。

そのまま痛みを耐え、同じ体勢のまま天井を眺める。

実の所、痛みは動けないほどではない。痛み以上に自分の体が重かったのだ、腕を動かそうとしても動かず、起き上がるうとしても動かない。

この体勢以外取れないのである。

そうして数分をすごした頃。

なにやら騒がしい声が近づいてきた。

何かと思いきちらを見て、ヒカルは心臓が止まるかと思う程仰天した。

心臓とまってるやろー！

などと、下らない突っ込みを思考するほどパニックに陥っていた。そこには子供姿のアカリと、今は亡き祖父・進藤平八の姿があったからだ。

ここが地獄だとしても祖父がいるのは可笑しくない。

あー、じいちゃんも悪い事してたんだな。くらいの感想が出るくらいだろう。

しかし、アカリがいるのはどうした事か。

それも子供としてだ。

何故？

何故？

何故？

それだけがループし、ヒカルの思考はそこで停止していた。

それを現実に戻したのは、アカリの放った第一声だった。

「……………その子……………誰？」

「っは？」

何故だろう。

アカリが拗ねているのは解る。あの口を尖らせて目を逸らせるのは、拗ねている時特有の仕草だ。

だが「その子」とはなんだ？

クスチヨンマークが頭に乱舞するヒカル
まったく現状がつかめていたなかった。

「なんじゃ、ヒカルが倒れたと聞いたから駆けつけてみれば、女の子と抱きあつるとは、ヒカルもそんな年頃じゃったんじゃない。」

どこか感心したような祖父の声は、ヒカルにはどこか遠い世界の言葉のように聞こえた。

うんうん。と頷いている祖父と、ジト目でチラチラとこちらの様子を伺っているアカリ。

現状は、ヒカルにとってまったく現実感がなかった。

ヒカルの思考も真っ白なまま停止していた。
再起動する見込みはまだ当分さきだろう。

その時、自分の上でモゾモゾと何かが動いた。

ヒカルは、はっとしたように体の上に視線を送る

そこには烏帽子を被った子供がいた。

ああ。これじゃ俺動けるわけねーじゃん。

とりあえず、動けなかった理由は解った。

だが、この子は何のなのか。

予想なら出来る。

自分の中で烏帽子に着物でHITする人物は一人しかいない。
だが、在り得ない。
胸に掛かる吐息の熱さを感じる。
体にかかる少女の重さを感じる。

呆然とするヒカル

しかし、少女は少し首を巡らせてから、ヒカルの瞳を見つめてくる。

その途端、パアッと眩いばかりの笑顔を見せ。

「ヒカル!!」

そう言って微笑んだ。

どこかで見えた事のある顔立ち。

つい最近まで待ち望んでいた、落ち着いた声。

それらは導き出す答えは一つ。

「佐為…なのか？」

それに対する答えは、少女の溢れんばかりの笑顔が肯定していた。
だが、何故実体をもって居るのか。ヒカルには、それが解らない。
嬉しいのは確かだが現実を認識できていなかった。

「ヒカル? ……え?!」

驚愕の瞳で佐為をみていたヒカルを、怪訝そうに見ていた佐為だったが、それを問いかけようとした瞬間、驚いたような表情で自分の体を見下ろした。

次にペタペタと自分の体を触り。

ついでヒカルの顔に触れる。

「ああ……。あまねく神よ、感謝します。」

佐為は、そう言ってヒカルに抱き付いて来たのだ。

それからは、大変だった。

アカリは突然「ヒカルのバカ！」と言ってどこかへ行ってしま
うし。平八は、これなら救急車はいらないだろうと、家へ帰ってし
まったのだ。

この状態では、幸運とも言えたがヒカルは現状がまったく理解で
きていなかった。

佐為の変化と環境の変化を吟味していたヒカルだったが、自分自
身の変化にもようやく気付いた。

それは、ヒカルと佐為が立ち上がった瞬間、とんでもない敗北感
とともに実感したのだが、それはヒカルの思考まともに戻すのに一
役買ったようだった。

それから、ここに至る経緯を佐為と共に話している間になんとか
推測だけは出来た。

つまりは過去だろうと。そう言う事だった。

なんとも荒唐無稽な話だが、ヒカルはその推測に信憑性が強い事
を自覚していた。

なんせ、祖父は生きていて。アカリは子供。

そして救急車。

その組み合わせは、ヒカルの記憶の中でも一番輝いている記憶だ
った。

それは、自分の運命の分かれ道。

佐為と出会ったその瞬間である。

だからか、ヒカルはこれを暮の神様の粹な計らいとして捉えた。
不安要素は沢山ある。しかし、夢であるか、現実であるか。それ
はヒカルにとってどうでもよかったのだ。

今、この身がある幸運を。最大限使ってやる。

それが、ヒカルの結論だった。

佐為に関してはもつと楽観的だった。

先ほど確認したが、佐為には肉体があった。

これが意味する所に佐為は無上の喜びを感じていた。

もう一度、碁石に触ることが出来る。

それが佐為の頭を占めていた。

次に思ったのは、もう誰の人生を犯す事無く、その身を囲碁に尽くせると言う事である。

本因坊秀策。そして進藤ヒカル。

二人の人生に深く関わった佐為は、それに関して途轍もない罪悪感と感謝を感じていたからである。

秀策に関しては言うまでも無く、彼の人生のほとんどを佐為が使用したのだ。

彼は佐為なしでも、世に名を残す素晴らしい棋士となっていただろう。

だが、佐為の我侭のために、彼の人生は佐為の人生となってしまうのだ。

そして、進藤ヒカル。

彼の人生を食い潰す事はなかったが。一番デリケートな時期に佐為は彼の元を去った。

離れたくはなかった。

だが、それはまったを聞く事なく、非情なまでに最期に分かれは訪れた。

それが、どれほどヒカルを傷つけていたかも知っている。故に嬉しかったのだ。

もう、誰も傷つける事無く。

己の暮を示す事が可能なのが、途方も無く嬉しかったのだ。

それぞれの、思惑はあるが、二人とも現状を喜んでいた。

そう、何より嬉しいのは、これから二人は嫌と言うほど、囲碁を打ち合える事。

それが二人にとって最大の幸福だった。

ヒカルはあれから数日立ったが今でも思う、目の前に差為が居る幸福を。

そして佐為も思う。今ヒカルの傍らに立つ喜びを。

二人はそんな感じで、幸せ一杯夢一杯なのであるが。現実には問題が多数存在していた。

佐為には戸籍がなかったのである。

あの後、平八とヒカルの両親には説明をした。

曰。彼女は、知り合ったばかりの友達で自分の事が解らない。

曰。彼女の名前は佐為と言う。

曰。自分は彼女を助けたいので、どうにかならないか？

で、ある。

無理があるだろうと。

ヒカルでも思わなくも無かったが、それでもこれ以上の説明は思いつかなかった。

正直に言えば、神様のバカヤロー！！面倒な問題だけこつちに丸投げすんな！！と罵詈雑言のあらしを胸中で叫んでいたのだが、そんな事しても現状は全く進展しない。

と言う事で、両親に泣きついたのだ。

これには両親も同情してか、家出から迷子まで、色々検索してみたのだが、一切情報が無かった。これには両親も困り果てたようだったが、父・正夫の一声で場が動き出した。その言葉は、

「行く所がないのなら、ウチにくるかい？」

である。

つまりは養子だ。

それには佐為も驚いて居たようだが、父と母は問題ないとばかりに微笑んで此方をみている。

これは母・美津子の思惑が強い。とヒカルは察した。なんせ自分は一人っ子である。

そして佐為は何故か現世では女の子になっている。

これを照らし合わせた結果、ヒカルは納得してしまった。嘗ての妻である、アカリの事が思い浮かんだのである。

ヒカルの子供は3人、長男、長女、次男だ。

長男のみの時アカリは必ずこっ漏らしていた。「次は絶対！！」女の子にしようね?!」である。何故か解らなかったが念願の長女が誕生してから、その理由は明らかになった。

物凄い、弄りまくるのだ。

服から髪から、とんでもない量の服・アクセサリを購入しては着せ替えて、それを延々と繰り返す。

しかもコレには際限がなかった。ヒカルが高給取りと言うのも理由の一つだろうが、それでもアカリらしからぬ散闊だった。

母があれば、やんちゃをするとは思えないが、ようはあれを再現したのだろう。

溜息と共にではあるが。ヒカルは安堵した。

これで、佐為はなんの不自由なくこの世界に居る事が出来る。

しかも自分と打ち放題だ。これ以上の幸せは無いだろう。

もつとも、佐為の名前が現代と不適合な事から、「佐為」を「彩」と変えるなどの事もあった、これは両親の配慮だろうとヒカルは思った。ようはイジメ対策だ。身の上が特殊な上に現代ではめつたにないであろう名前。これは十分にイジメの対象になりうるのである。その場でヒカルは良い案だと了承し。差為も幾分不機嫌そうではあったが了承した。

それに、現在ヒカルは両親命令で、ずっと佐為と一緒に居るのである。佐為を不安にさせないようにとの事だったが、これはヒカルにとって願ってもない事だった。

ヒカルは、片時も佐為の傍をはなれるつもりは無いのである。

そして冒頭に戻る。

佐為の戸籍登録と養子縁組のために、今頃走り回っている両親に悪い気がしたが、ヒカルも佐為も確認したい事があった。

自分のライバルである、塔矢アキラの事だ。

家に居ても佐為と囲碁を打つか、学校に行けない間の宿題をするくらいである。

ならばと思いい両親に断ってから、ここに来たのである。

「佐為。そろそろ泣きやめつて。」

ハンカチで涙を拭いいつもヒカルそう言った。

佐為の感動が解らないわけでは、ないのだが。ヒカルはこの世界でのアキラと一刻も早く会いたいのである。

「ぐす……そう、でしたね。はい。行きましようヒカル。」

佐為はグシグシと服の袖で涙を拭きながらニパツと笑う。

それに少し苦笑いを零して二人そろって入り口へと向かう。

「あゝ。佐為、その、顔あらってからな。」

ガツ

そんな音を立てて囲碁サロンのドアを開ける。

「あら、こんにちは。どうぞ。」

碁会所の受付嬢、市原晴美は、見かけない顔と言つか珍しい小学生のカップルに嬉しそうに声をかけた。

語会所い子供が来るのは珍しいのである。

例外とも言える子が現在いるが、その子の親が経営しているのだから、その子がいるのは当然とも言える。

「名前書いてね？ あら、ここは始めてじゃないのかしら？」

もしかしたら、おじいちゃんを探しに来ただけなのかしら？

二人の誰かを探すような目を見て市原はそう思った。

「ん。いや、初めて、ここって誰でも碁が打てるの？」

彷徨うような視線を此方に向けて男の子がそう言う。

あらら。初めてって、碁会所に来るのも初めてなんじゃないかしら？

「打てるわよ。そちらの子も初めてなのかしら？」

「はい。私も初めてだと。」

この佐為の答えはあらかじめヒカルと相談していた回答である。前回は再現したい訳ではないが、そちらの方が色々と楽だから。そうしようと、結論したのである。

「そつかあ。でも大丈夫よ？ 皆優しい人ばかりだからね。」

かわいい子ねー。

そんな事を思いつつ、不安にならないようそう声をかけた。

「それじゃ、二人ともここに名前と棋力を記入してくるかな？」

コクン。と同時に頷く二人を、市原は二人を微笑ましくみながら、記入欄を示す。

アキラ君の友達になってくれたらいいんだけど。

そう思う。

あんなに可愛らしい顔立ちなのに、アキラには友人が少ないのを市原は知っているのである。それは、囲碁の勉強に時間を取られるが故の欠点だった。

少し優秀なくらいなら、院生と言う道があるが、アキラのそれはプロに匹敵する実力である。

自然と友達は減っていく。

同じ土俵に立ち。そして切磋琢磨できる存在。それだけがアキラの友人足りえるのだ。

「だから進藤でいいだろ？」

「しかし、私はまだ……。」

「いいんだって。親父や、かあさんはそう書けって言うと思っぞ。」
「でも……。」

少し思考を飛ばしていた間に何やら拗れて来ているみたいだ。
名前と棋力書くだけなのに……

そう思いつつ視点を下ろすと、なにやら、かわいい生き物がいた。
手を胸の前で組んで、ウルウルとした瞳をヒカルに向けて口を尖
らせている少女。

不貞腐れたように、そっぽを向いて、しかし心配げにチラチラと
少女を伺っている少年。

やばいわ!!

市原にとってこの二人は、かわいい二人組みから途轍もなくカツ
ワイイ二人組みにランクUPされた。

「ど、どうしたの？」

サツと二人の視線が自分に来る。

ウルウルとした少女の視線と、キラキラとした何かを期待した初
年の視線。

思わずカウンター越しに抱きつきたくなる衝動を押し込める。

ダメヨ。私!! アキラ君がいるでしょ？ ダメだったら!!

「佐為がさ名前書けないって言うんだよ。」

「え？」

「違います!! 字は書けるに決まっていますでしょうヒカル!!」

「じゃあ「進藤」って……書いてくれよ。」

うわ。かわいい……。

じゃなくて、名前がかけない？

良く解らないけど。

「あのね、書ける文字だけでいいからね？ もしダメならこの子に
書いてもらったら……あら、ヒカル君は凄く字上手いわね。」

市川は、佐為がいまだに漢字が書けないのだと勘違いしているのだ。

そしてヒカルの字の上手さに驚嘆した。

ヒカルが字を書くのが上手くなったのは色々理由があるのだが、それは後ほど語るとしよう。

「ああ、違う違う、こいつうちに養子に来るんだけどさ、まだ正式に書類回ったわけじゃないからって、前の名前書こうとしたんだよ。」

「…………え？」

帰ってきた答えに市川はしばし呆然としていた。

ヒカル自身は事実をそのまま伝えただけなのだが、それでも養子と言うのはインパクトのある言葉なのである。

養子…そう言われるとある事ない事想像してしまうのが人間である。

多分に漏れず、市川の顔も痛ましげな表情に変わっていった。

「しかし、ヒカル。私は、まだ正式に家族となったわけでは無いのですから…」

「あー！ー！もう、ほんと馬鹿だな？俺と差為が家族じゃないわけないだろ？何年一緒にいたと思っただよ。」

「む…………それも、そうですね。」

その言葉に納得したのか、佐為はペンを取り名前を記入していく。

【進藤 彩】

「ヒカル？ 棋力はどうしましょうか？」

「んー。俺のマネしてみたなら？」

色々と悲劇的な妄想をしていた市河はそこで現実に帰ってきた。そう言えば棋力に付いては知らなかった。そして、棋力の覧を見て噴出した。

【名前：進藤 ヒカル 棋力：世界一強い】

「つぶ。ぶつあははは！！」

爆笑である。

これほど彼女が笑う理由は、この子の度胸に驚いたのだ。

世界に誇る【塔矢 行洋】その人が経営している碁会所で、世界一強いと、そう言うのだから。

しかも、ヒカル達は初心者なのだ。子供の微笑ましい虚勢を見たのと相まって市河のツボをついた。

「む。世界一なんてまだまだ先の話ですよ、ヒカル。まずは私を圧倒してみなさい！！」

市河の爆笑を無視したかのように、佐為は乱暴に棋力の覧を埋めていく。

【名前：進藤 彩 棋力：世界一上手い】

「ぶぶつ！！！！ ぶはははは！！！！」

これも市河のツボにはまった。

揃いも揃ってなんと豪胆なのか。そんな感想を思いながら。

もっともヒカルと佐為にとっては、これは決定事項。共に神に挑

む身なのだ、世界など軽く制覇してみせる。

そんな意気込みと共に記入したのだ。

ゆえに市河の笑いにもさして反応しなかった、少しばかりジト目で見る事はするが。

「ど、どうしたの市河さん」

少し心配気な声色の少年の声。

恐らく市河の爆笑を聞いてこちらに来たのだらうオカッパ頭の小学生。

「ア、アキラ君!! ちょ、ちよつと見てぶつぶぶ。」

堪えきれない笑いの衝動を抑えるように、紙を差し出す。

それを見たアキラは目を見開いた。

「……凄いね。」

アキラは笑う事はなかった。

だが、何の臆面も無く世界一などと書ける人間は稀だ。

しかもここは父の経営している語会所。こんな事を書ける人間は居ないといってもいい。

だから、単純に二人の自信のもちように驚いたのだ。

「そうか?」

「そうなのでしょうか?」

しかも、この反応だ。

二人で見詰め合って首をかしげている。この二人は二人ともが自分分が世界で一番だと疑っていない。

言いよつゝの無い不快感。そして、憧憬。
その二つがアキラの中に生まれる。
だからだろう。

「僕と勝負しない？」

こんな事を言ってしまったのは。

「いいぜ。俺は進藤 ヒカル。」

「私は、進藤 彩です。」

即答での了承に僅かに怯みながらもアキラは返事を返す。

「あ、ボクは塔矢 アキラ。六年生だ。」

「お。一緒だな。」

「私はどうなのでしょう？」

「ん？ ああ、一緒だとおもつ。」

「では、私も六年生です。」

少し違和感を感じたがアキラは気にした風も無く席に促す。

この瞬間を後にアキラはこう語った。

運命と言つゝのがあるとするれば、あの瞬間が正にそれだったのだろうと。

2話（後書き）

なんか、切り方が解らなくなっって凄い中途半端になりました。

実の所アキラも女性にするか？

と思索していたのですが、女流棋士と棋士の違いが解らず結局こうなりました。

読者の方にアキラの女性化を望む声があるのならまだ修正可能なのですが。

どうしましょ？

意見ありましたら、感想覧に評価なしのコメントよろしくお願います

3話（前書き）

佐為についての注意事項。

- ・「」の中では彩。
- ・「」の外では佐為と表記します。
- ・ただ、他の人の視点で書く事があれば彩と表記するかもしれない。

3話

一体これは、なんなんだろう。

アキラは現在、途方にくれていた。

その原因は自分が並べている棋譜にある。

それは先日打たれた一局だった。

不思議な少年と少女。

名前は進藤ヒカルと進藤彩。

彼等の碁を都合三度見た。

二つは自分の打った碁だった。一局は進藤彩による指導碁、もう一局は4石置いての進藤ヒカルとの一局だった。

指導碁に置いては言うに及ばず。歴然な差が在るが故に行われる物。

そして、自分と進藤ヒカルの碁。

4石置いての対局だったが……結果は5目差で敗れた。

この二局の後アキラは思った。

自分は何なのだろうと。

目の前の二人が書いた棋力【世界一】

その文字に苛立ちがあったのは確かだった。何を傲慢な、と。子供に冗談にしてもアキラには肝要でできなかった。

棋士の高みを知っているのかと。高みを知り。そこに届かないと解って尚、挑み続ける人々の絶望をしっているのかと。

父の傍らでそう言った夢が届かなかった人々を沢山見てきた。

父の与り知らぬ所で自分は、そう言った夢を潰してしまった事もあった。

それを、棋士の歩みを知りもせず。【世界一】などと許せる物ではない。

故にアキラは初めこう思っていた。
僕が、棋士の高みを知らしめよう。

この二人に届かぬ高みがあるのだと。

だが、結果はどうだ？ 傲慢なのはどちらだったのか。高みを知らしめる？ ちゃんちゃらおかしい。逆に自分は、井の中の蛙なのだと知らされた。手の届かぬ高みを歩む者が居るのだと知らされただけだ。滑稽なのはどちらなのか。

自分は何だったのか……。

自分には“誰よりも努力する才能”があると頭を撫でてくれた父。自分には“限りなく囲碁を愛する才能”があると微笑んでくれた父。

それらが霞みの向こうに消えていくような気がする。

壁が出来るのは構わない。追う事には馴れているから構わない。だが、この壁は越える事が出来るのか？ この相手の速度に追いつけるのか？

初めて自分に訪れた絶望は、あまりにも深く、鋭い。

俯き、膝に落ちる雫が自分を構成してた自信・自負・責任。それらを落としていくかのようであまらなかつた。

そして、三局目が始まる。

その開始は自分に声を掛けてきた少女から。

「ごめんね。少し席を譲ってもらえませんか？」

その言葉に、呆然として涙を流していたアキラは、ハツとしたように顔を上げる。

ゴシゴシと涙を拭い、黙って席を譲るアキラに、佐為はもう一度「ごめんね。」と声をかけて席に着く。

「ん？ 俺らで打つの？」

「ええ。今の塔矢君は少々マズイですから、少しだけ先を見せましよう？」

「は？ ……あ！ 解った。んじゃ一番最後に打ったのでいいか？」

佐為の言葉を、ヒカルは初めの内理解できなかった。

アキラがマズイ？ なんだそりゃ？

って感じである。ヒカルの中の塔矢アキラは、決して折れず曲がない鋭い名刀のような存在だった。

塔矢行洋が鍛え。そして、藤原佐為が導いた稀代の棋士。

それがヒカルの持つアキラへの嘘偽り無い感想だった。

故にヒカルは、アキラにマズイと言う言葉が一番そぐわないと思っっている。

だが、ヒカルがアキラに目をやって一目で気付いた。

あの塔矢アキラが折れかけている。それも、根元から。

ヒカルは何度も、こう言う状態の者を見た事があった。

それもそうだろう、沢山の人達をこんな状態にしていたのは、他ならぬヒカル自身であったのだから。

生前と言うのはオカシイがヒカルは強かった。

それこそ敵が居ないと思われるほどに。そして、その強さを遺憾なく発揮したのが20代の頃。その当時は挑んでくる者は手加減無く一刀両断にし。去っていく者にも気付かない程に自分の研鑽にのみり込んでいた。

その結果、3桁に登る挫折する者が出た。

当時の囲碁を志す者にとってヒカルとは憧れであり、恐怖であっ

た。

強さに憧れるが、その読みの深さと底のない才能に恐れを抱く。それほどに、ヒカルは無慈悲に強かったのだ。

そして、そんなヒカルを諫めたのが妻であるアカリと、ライバルであるアキラだった。

無慈悲なまでのこの棋譜を見る。君は何を目指して碁を打つのか？

勝つ事しか考えていない碁は、ヒカルらしくないよ？

二人の言葉は、ヒカルに途轍もない衝撃を与えた。

そしてこれまでの棋譜を再確認し、ヒカルは泣いた。

自分の碁は、これでは無いと。

佐為の碁は、これほどに相手を貶めないと。

それから、ヒカルの碁は変わった。

そして無慈悲なまでの一手は塔矢アキラにのみ打つと、アキラに約束までした。

それにアキラは笑って当然だと答えたのだった。

それに感化されてか、その感覚のまま幼少のアキラと打っていたのだ。

あの時、自分が切り伏せてきた者達と同じ顔をしているアキラは、本当に危険だった。

「いえ、棋譜並べでは面白くないでしょう？」

「は？ でも先を見せるって……。」

「ええ。ですが、必ずしも完璧に再現する必要はないと思います。」

「それもそうだな。それじゃ30手までこいつとの名人戦でそこからは独自に展開しようか？」

「わかりました。それじゃ手加減しませんからね。」

「そんな事しなくていいって。」

二人の会話はアキラには理解出来ない。

もちろん、この二人意外には理解出来ないのだが。今のアキラには右から左へ抜けるただの言葉の羅列と一緒だった。

もつとも今のアキラは聞こえて理解しても、反応しない。

それほどに塔矢アキラは打ちのめされていた。

「さて、塔矢君？　これから貴方の為の一局をみせましょう。しかとその目に焼き付けなさい。」

「え？」

その言葉をかけられアキラは佐為を見た。

消え入りそうな声は、アキラの物とは思えないほど覇気が無く、弱弱しかった。

それを呆れたように見やるヒカル。

この程度の絶望、乗り越えてこそ塔矢アキラだと思っからこそ、そう言う表情になるのだが、今のアキラに以前の覇気を求める事にそむちやと言うものだろう。

「あのな、これからお前が踏み込む世界の深さを教えてやるからさ。」

少し乱暴な言い方だが、ヒカルにとってアキラの扱いは生前からそんな感じだった。

丁寧に接する事などヒカルには出来ない。

もちろん意図して、優しい言葉をかける事は可能だが、今のアキラには必要とは感じなかったからだ。

「っ！！！」

一瞬呆けたような表情をしたアキラだったが、次の瞬間には噛み付かんばかりにヒカルを睨む。

はは。やっぱ塔矢だな。格下に見られるとキレるのはこの頃からだよ。

そつだ、これでこそ塔矢アキラ。今にも「ふざけるな」と叫びだしそうじゃないか。

塔矢は、やはり塔矢だった。

それがヒカルは嬉しい。

笑うヒカルと烈火の如く睨みつけるアキラ。二人に佐為は、優しいな表情を向けていた。

嘗てあつた風景そのままだったからだ。

塔矢アキラは別な世界でも尚、塔矢アキラだった。

それを佐為は嬉しく感じていた。

「さて、塔矢君も再起動したようなので始めましょうか。ヒカル。」

「オツケー。んじゃ始めよう。」

「っ。すみません。」

「いいつて、まああんな状態になるのは俺も予想外だったからさ。」

「君に謝つたんじゃない!!」

「ははは。解つてるつて。ちよつと乗つてみただけだろう?」

「~~~~~っ!!」

「はあ。ヒカル。塔矢君で遊ぶのは止めなさい。」

「りよ〜かい。んじゃ俺がニギルぜ。」

「ええ。」

ヒカルを睨みつけるアキラを放置して二人の対局が始まった。

ヒカルに対して敵愾心まるだしのアキラだったが、対局が始まる

と同時にそれは露と消えた。

雰囲気が変わったからだ。

何の？ と問われれば二人のだ。ヒカルは表情が一切消えて睨むように佐為を見つめていた。佐為もまた、優しげな表情が削げ落ちヒカルと同じような表情でヒカルを見つめる。

それに息を呑んだのは、何もアキラだけでは無かった。

周りにいる人々もまたそうだった。

アキラが声を荒げてから、子供達の様子を見にこの場を集まってきたのだ。

「塔矢。これから打つ碁は絶対忘れんじやないぞ。」

佐為の顔を捉えたままのヒカルの声と共に、対局は始まった。

そして、アキラが現在並べているは、その時の一局である。

「これに……僕が並べるのか？」

アキラは自分に問いかけるも、自分の答えは不明。

むしろ、無理かもしれない。とそう思う自分がいるのも解っていた。

それほどに高度な一局だった。

黒は進藤彩。白は進藤ヒカル。

結局、黒・進藤彩の反目勝ちではあるが。どちらも子供の棋力ではなかった。あるいは父に並ぶのではないか？ とすらアキラは思う。

もちろん常識で考えたらありえないだろうが。そう思ってしまっ
程の一局。

「はあ……。」

あれから数日経つが、あの日は夢か幻のような感じもしていた。あの日は確かに存在したと確かめる為に何度も並べている。自分ならどう打つか、進藤ヒカルはそれにどう答える？ 進藤彩は？ 何度となく自分に問いかけるが、仮想敵は自分の想像を超えて打ち返してくるのだから、想像も中途半端に終る。

しかも、名前しか聞いていなかったのは痛かった。

院生、もしくは高名な師に付いているのだろうと思っただが、どちらもヒットしなかった。

必死に彼等の名を聞いてくる自分に疑問を抱いたのか、父すらも協力してくれたのに、一切情報が出てこなかったのだ。

これは痛恨の痛みだった。

いずれプロ棋士として相対するのだと思うが、それまで接点がないのは自分にとってメリットは皆無でデメリットしかない。

「ふう。」

何度目の溜息だろうか。

あの日から常に、この棋譜の事を考えてきた。

彼、進藤ヒカルは最後にこう言った。

塔矢。これはいずれ、お前にも打てる碁だ。だから今、足踏みするのは別にかまわねーよ。でもな、お前が足を止めてる間に俺達もつと先へ進むぜ？

だから、さ……死に物狂いで

追って来い。

その言葉を聞いた瞬間、落雷にでもあったかのように体が震えた。一番初めに思ったのは、何故？

何故、自分なのか？

何故だ？ 何故、僕に？

はあ？ お前がアキラだからだろうか？ なあ佐：彩？

ええ。貴方が塔矢君だからです。

その言葉は囲碁界の異端児たる塔矢アキラではなく。

個人としての塔矢アキラに掛けられた言葉だと、そう感じた。

風評に関わらず。自分だからこそ、追って来いと言ったと。そう言われた気がした。

それは嬉しく、初めて同種の、いや、それ以上の存在を仲間を持ったような気がしたのだ。

必ず追いこしてやる。とそう思った。

もっとも、その決意も棋譜を並べる内に徐々にではあるが消沈気味だ。

彼等の住居さえ解れば、進藤彩に、癪だが進藤ヒカルにも対局を申し込んで研鑽出来るのにと。

最近はそればかり考えていた。

「アキラ君」

思考を遮ったのは市河の声だった。

「指導碁お願いされたんだけど、断つといたからね。」

「はい。すみません。」

この配慮はアキラを見ての判断だった。

これまで同世代に負けた事のないアキラだ、初の黒星でこれほどに打ちのめされているのだから、そつとしてあげたかったのである。

「あの子達を待つてるの？」

「……ハイ。」

「フフ。そつかあ。」

「どうしたんです？」

「ん〜。ちよつとね。」

実を言えば、市河は嬉しかった。

アキラはある意味、孤独だったから。

それが、先日以降アキラには同種の存在が出来た。それもアキラ以上の棋力をもった子達。

市河はチラつとみた程度だったが、シロウトの市河が見ても進藤ズの実力は飛びぬけていた。

アキラ以上に。

だから、これからアキラは孤独ではない。

アキラの反応を見るに、ちよつとばかり差が有りすぎるのかも知れないが、それもすぐに埋まるだろうと市河は思っている。

アキラは、諦めないと信じているからだ。

そして、目標がある人は凄まじい速度で伸びる事を知っているから。^{ら。}

だから市河は嬉しかった。

なおもクスクス、と笑う市河をポカンとした表情で見ていたアキラだが、おかしな市河さん。と思ひ。もう一度棋譜を並べ始める。

「あつ。そうだー!!」

「……?」

「私、帰りぎわに全国子供囲碁大会のチラシあげたんだった。」

「今日、棋院でやってる？」

「そうそう。ヒカル君は気が乗らないみたいだったけど、彩ちゃんの方は行ききたそうだったから居るかもしれないわね。」

「……………」

そんな所に行ったところで、あの二人に刺激を与えるものがあるとは思えない。

そう思うアキラだが、今まで情報は名前だけだったのだ。少しでも可能性があるのであれば行動せざるをえない。

「ん。ちょっと行ってみます!!！」

「はいなー。居るといいわね。」

「うん!!！ つあ、それと僕が居ない間に彼等が来たら引き止めておいて!!！」

「りょーかい。」

そう言いながらも駆けていくアキラに、市河はやはり嬉しさを感じた。

必死になつて切磋琢磨出来る者がいると言つ事は良い事だ。

「うんうん。ガンバレ若者!!！」

「…………… イツちゃん。それはどうよ？」

アキラが必死で会場に向けて走っている頃、ヒカル達は会場には居なかった。

その周辺にすら居なかったのだ。

そう、ヒカルと佐為は下校途中だった。

以前ならば、余裕をもって会場入りしていたのだが、今回は佐為の転校と言つイベントがあった為に帰宅が遅れていたのだ。

もつとも、転校自体はアキラとの対局した翌日にはしていた。だが、珍しい転校生に加えて、佐為はあかりに以上の美“少女”であったのだ。

そんな存在を小学生がそうそうに逃がすはずが無く。

それに加えて終始ヒカルと一緒にいるのだ、そのヒカルも急に大人びた雰囲気を出し始めるしまつ。

当然、男子生徒は冷やかしを掛けるが、それにもヒカルは動じた風も無く。こう言い放った。

「俺が彩と一緒にいるのは当然だろ？」

それに追隨するように佐為もこう言うのだ。

「そうですね。その方が嬉しいです。」

と。

ヒカルは憮然と言い放つが、佐為に置いては満面の笑顔で、だ。

そんな事を言われては、男子生徒は呆れ、女生徒においてはヒカルに憤慨する者も出た。

男子生徒にとっては、まあヒカルだし。ですむが。

女生徒においては違った。ヒカルに直接「あかりはどうするのよ」と言う者はいないが、それでも視線に非難の色が出る者はいた。

その視線が鬱陶しくなったヒカルは放課後はすぐ帰るようにならしたが、集団下校の際には図書室で3人で囲碁の勉強をして時間を潰していたのだ。

もちろん校則違反である。

集団下校の意味がない。

それも教師を説得して可能にしているのだが、この行動から見てもヒカルに学友に理解を求めているようには見えないだろう。

実の所、ヒカルは、必要な関係は維持するつもりであるが、新し

い関係を築く。と言う選択は全くと言っていいほど頭に無かった。それもそうだろう。見た目は二人とも子供だが、精神的にはご老人である。佐為に至ってはいったいどんな精神構造をしてるのか謎すぎるだろう。

そもそも、小学生と友達関係になれる事の方が珍しい。よって、上記のような行動になっていたのだった。

「しかし。まさか今日、集団下校だったなんてな。」
「うう。今日くらい我慢してくれても良かったじゃないですかヒカル。」

そして下校時。

佐為はずっとグズっていた。

佐為は今日をとても楽しみに思っていたのだ。理由としては生身で緒方と塔矢行洋に会える一番初めの機会だったからだ。

その辺はヒカルも察していたので棋院に向かう事に否はなかったのだが、日にちが悪かったとしかいえない。

「あゝほら、もしかしたら会えなかったかもしれないし……」

「会えたに決まっているでしょう！！ うううううう。ヒカルのバカバカバカバカバカバカバカバカバカバカー！ツ！！！」

目を逸らしながらのヒカルの言葉は余りにも説得力に欠けている。遂には、ふえ~~~~~んっ！ と泣き始める佐為にヒカルは思わず後ずさった。

「あーもう。ゴメンって。そんなに泣くなよ。」

こうなってしまうとヒカルにはどうしようも無かった。とりあえず気の済むまで泣かせるに限るのだ。

しかし、そこは佐為を求め続けたヒカルだ。放置などではしない。

オロオロと手を振ったり、違う話題を振ったりするのだが、佐為はジロリと一睨みしてまた泣き出す。

故にヒカルは途方にくれて更拳動に不振な行動が出るようになる。まさに悪循環だった。

「あ、彩ちゃん？ その泣き止んで？ また今度行こうよ。私も一緒に行きたいな。」

これに見かねたアカリが声をかける。

佐為の泣く姿を始めて見たアカリだが、そこは従来の優しさで慰めにかかる。

アカリが何故ここに居るのかと言うと理由は単純にヒカル達と一緒に囲碁の勉強に付き合っていたからだ。

初めはヒカルと佐為の関係に危機感をもって一緒にいたのだが、数日でアカリは碁の魅力に取り付かれていた。

初めはヒカルと佐為に基本から教えてもらい。2日目には9路盤を用意して対局などしていた。

それもあって、昼休みや放課後などは三人で図書室に籠る事が多くなっていたのだ。

その甲斐あってか、アカリは二人の事を大方理解した。

ヒカルに置いては、何故これほど囲碁が上手いのか不思議に思わなくも無かったが、二人は上手かった。

そして、この学校に囲碁をする人間などヒカルと佐為だけだ。

話題の合わない子と一緒にいても退屈なだけ。

だから二人は常に一緒なんだ。

佐為があの時ヒカルの上で気絶していた少女だと気付いていたが、

それには触れず。ただそれだけを理解した。

もちろん、それが全てでは無いがアカリの予想はほぼ当りだった。

「うう。でも、今日しか機会がないです。」

「っあ。う、うーん。それじゃあしょうがないけど、誰かに会うつもりだったんだよね？」

「……はい。」

「それなら明日にでも会いに行こう？ 近くにいる人なら此方から向かったらいいじゃない？」

アカリはジロツとヒカルと見てからそう答える。

「うう。とヒカルは後ずさるが、すでにアカリは佐為に向いているので見ていない。」

「近くに居るのですが。その、軽々しく会える人では無いと思うので……。」

「そっかあ。じゃあ少しだけ待とうよ、ね？」

「……………ハイ。」

佐為は長い沈黙の後にそう答えた。

「……………ヒカル。彩ちゃん泣かせるなんて、何したの!？」

グシグシと涙を拭う佐為の肩を抱きながら、アカリはヒカルに問い詰める。

「あゝゝゝ。いや、あえて言うなら何もしなかった？」

「バカヒカル!!! 今度、彩ちゃん泣かせたら許さないからね!!!」

ハハハ。無理じゃないかなー。彩ってば良く泣くし。

乾いた笑いと、ボソツと呟いた言葉だったが、佐為とアカリは正確に聞き取っていた。

「ヒカルが意地悪な事ばかりするからでしょう!」

「そうです。ヒカルはイジワルです。昔から何も変わってません。」

ヒカルは乾いた笑いを返す事しか出来なかった。

「あー。そんな事より……」

「「そんな事!」」

「う。いや、その、それは言葉の綾で……」

「「……。」」

ジトつと見つめてくる二つの視線にまたも後ずさる。

「ゴメンナサイ。」

「「よろしい。」」

「「……はあ。」」

元妻と佐為の二重奏は流石のヒカルも堪えた。

アカリは頑固で佐為には無意識化の罪悪感。その二つに敵対されてはヒカルには敗北しかないのである。

「それで、何?」

「ああ、それでな。あかりは今日も寄ってくるのか?」

あかりが進藤家に寄っていく。

これは前世ではなかった事だが、二人は別段違和感を感じてはいなかった。

ヒカルは元より妻として一つ屋根の下で過ごしていた関係である。

佐為にとっては、見守ってきたヒカルの日常なのだから、ヒカルと同じで全く問題ない。

それに悪い事は一つも無いのだから、歓迎こそすれ、拒否する理由はなかった。

「んう。そうだね。今日も二人にボロ負けしちゃったし。ヒカルの家で一緒に勉強するよ。」

「そか。それじゃ即効で来るか？」

「ううん。一度うちに帰るよ。」

「んじゃ、かあさんに言っとくから。」

「うん。」

「それにしても、あかりは随分囲碁が好きになったのですね。」

「え？ そう、かな？」

「そうですよ。」

「俺もそう思う。」

「あはは。でもやってみると面白いしね。でも彩ちゃんやヒカルほどじゃないよ。」

「そりゃそうだ、俺は囲碁がほんとう好きだから。佐為と同じくらい好きだからな。」

「フフ。私は世界一囲碁が好きだと誇りを持って言えますよ。」

「彩ちゃんってば……すごい自信。」

「いやいや。彩が言っていると俺はすげえ実感籠っていると感じるんだけど。」

「それもそうかも。」

「当然です！ 私は世界一の囲碁好きですから！..！」

「なら俺は世界一の囲碁馬鹿だから。」

「あはは。二人とも囲碁が大好きなのね。」

「「当然！..！」」

生前とは違う関係。

「ただ、二人はこれもまた良し。いや、これは尚良しと笑顔でこの関係を受け入れていた。一番懸念していたアカリとの関係が最良の形で自分達の中に溶け込めたのだから、二人はそれがとても嬉しかった。」

そんな楽しげな三人を他所に、一人悔しさに臍を噛む者もいた。

「つく。やはり居なかったか……。」

荒い息のままパイプ椅子に腰掛けて、息をつくアキラである。

君はレギュラーなんだから、全然悔しくないよ？

これからもバンバン出してあげるからね？

それじゃ。塔矢アキラに幸有……幸あれ……。

3話（後書き）

スローペースの更新でごめんなさいね。

何故か仕事忙しくなって、ちよっとこちらに時間裂く余裕が取れにくくなっています。

4話

パンツッ！！

そんな音が校庭に木霊こたまする。

自分の頭の上で起きた音に、アカリは驚いたように顔を上げる。アカリの相手をしていた筒井も、目を開いて呆然と両者を見た。

両者とは、筒井の同級生である加賀と、今は一介の小学生である進藤ヒカルである。

今日は、ヒカル・佐為・アカリの三人で葉瀬中の創立祭に参加していたのである。

その中で前世と同じように筒井が詰碁の問題を出していたのでそれに参加していた。

それは今のヒカルと佐為には簡単すぎた。

ゆえに、ヒカルがアカリにさせていたのである。

段々難しくなっていく問題に時間がかかりながらも正解を答えていくアカリに、ヒカルと佐為は自身の子供が成長したかのような微笑ましさを感じていた。

そこに加賀の登場である。

しかも、タバコを碁盤に押し付けると言う暴挙をしようとした。

それはヒカルにとって我慢出来ない事だった。

悩んで、考えて、それでもやはり悩みぬいているアカリを邪魔するな。と、そう言う意思を込めてタバコを持っていた手を払ったのである。

「邪魔するなよ。」

「アカリ、落ち着いて考えれば貴女なら解ける問題です。がんばり

なさい。」

「え？ あ、うん！！」

睨みあっているヒカルと加賀をよそに、佐為が優しく盤上に意識を向けさせる。

集中させてしまえばアカリはヒカル以上とまではいかないが、それに迫るほどの集中力を見せるので周りの声も入らなくなってしまっている。

「お前、いい度胸だな。」

「……。」

「なんとか言えよ。」

「こいつの邪魔するな。」

「ツケ。囲碁なんて何がおもしれーのか、ただ辛気臭いだけだぜ。」

「なら、余計に邪魔するな。」

「っち。」

加賀の方から目を逸らし、盤上に視線を移す。

ヒカルも盤上に目を移す。

んだよ。コイツ……。

盤上を見つつも加賀は隣にいるヒカルをチラチラと見ていた。

真面目に盤上を見るヒカルの目には何が映っているのか。加賀にとって囲碁とは下らない物だった。

その認識の要因となっているのは塔矢アキラと父親だ。

塔矢はワザと自分に負ける。

父は塔矢アキラの力を実感するとさっさと匙を投げる。

口クな奴がいない。

それが囲碁に対する思いだった。

そんな想いをもちつつ中学に入ったのだが、その中で筒井と言う生徒はなかなか好感が持てた。

本当に囲碁を好きなのだと、そう思えたからだ。

だからこそ、今ここにいるし、この前頼みに来た大会も人数さえ揃えて来ていたら参加してやってもよかったのだ。

1人しかない囲碁部、その催しをすると聞いて様子を見に来たのだが、なかなかどうして老若男女に問わず人がいた。

今も真面目に詰碁の回答を考えている子供がいるが、それを見て加賀は少しばかりイラついたのだ。

こんなモノに何を真剣に、と。

なかば八つ当たりのような感情とともに碁盤にタバコを押し付けてみるつもりだったのだが、それはヒカルに阻止されてしまった。

「こう……かな？」

加賀が思考に没頭している間に、アカリは詰碁の正解を答えていた。

「凄い……正解だよ。」

「やった。どうヒカル、彩ちゃん!」

ツパと笑顔で振り向いてくるアカリに顔を綻ばせながら頷くヒカル。

「素晴らしいです。良く悩み、良く考えていました。答えを導き出せたのは日頃の弛まぬ研鑽があればこそです。本当に、素晴らしいですよ。」

アカリの頭を撫でながらの、佐為の手放しの褒め言葉。

「えへへ。」

それに頬を染めながらも笑顔を返すアカリ。

ヒカルと佐為は我が子の成長を見るかのように、アカリの成長を喜んでいた。

今のアカリは、ヒカルと佐為の弟子のような状態なのだが、アカリにその自覚がなく。ヒカルと佐為も弟子とは思っていないため。自身の子供に接するかのようには相手をしていなかったのだ。

「君は、いや、君達は……困暮得意なの？」

「？」

筒井の問いにアカリは疑問顔で振り返る。

佐為も手をアカリから離し、筒井に視線を向ける。

「君が解いた詰碁はね、とても難しい物だったから。これを解くには、それこそ塔矢アキラ級とまでは言わないけど、それに迫るくらいの棋力があるんだよ。」

疑問顔のアカリに説明をする筒井。

しかし、悲しいかな。アカリは塔矢アキラの存在すら知らないのだ。故に更に疑問顔で首を傾げる。

「んんんん？」

「少なくとも院生レベルの棋力が必要だと言ってるんですよ。院生は解りますよね？」

アカリに優しく噛み砕いて説明する佐為。

「あ、うん。院生は解るよ。って、え？ えー！ー！ー！ー！？」

納得顔だったアカリだが、内容を理解すると驚愕の叫び声をあげた。

「えっと、ちょっとそれは無いよ！！ いつもヒカルと彩ちゃんに負けちゃうし！！ その、ほんの数日前に始めたばかりだから！！」
「でも、これは相当難しい詰碁だしね。本当にそれくらいの棋力が必要なんだよ。」

困惑するしかないアカリと、囲碁部に勧誘すべきか悩む筒井。

「安心しろって、院生レベルは無いから。棋力で言うなら海王中の三將に勝てれば御の字って所だろ。」

「三將なんて今のアカリなら楽勝です！！ 何を言ってるんですかヒカル！！」

少しばかり呆れたように肩をすくめるヒカルと、まるで子供をバカ可愛がりする母親のように噛み付く佐為。

「大体さ。詰碁とかは棋力ウンヌンじゃないから。確かに棋力が上がれば簡単に解けるから棋力支点で書かれてあるけどな。あーゆうのは如何に碁の流れを掴めるか、それに閃き。それだけだよ。」

佐為の態度に少し引いたヒカルだが、気にせず言葉を続けた。

「そつなの？」

「そつですよ。」

そんなやり取りをしている三人組を筒井はマジマジと見つめた。
なんとも不思議な構成だ。

筒井の心の声はそれに尽きた。

アカリは詰碁に答える度に後ろを振り返って「どう？」と笑顔で振り向き。

ヒカルはそれに少し頬を緩ませながら頷く。

佐為は「素晴らしいです。」と満面の笑顔で言いながらアカリの頭を撫でる。

これでは、親子じゃないか。

アカリの棋力にも驚いた筒井だったが、一番驚いたのはその関係性。

どう言う育ち方をすればこうなるのか？それが一番疑問だった。

僕は、バカな事を考えてるな。

筒井は自分の思考に苦笑いを浮かべた。

馬鹿らしいと思ったからだ。

どう見ても同級生と一緒に祭りに来たとしか見えない。

「ほう。口は達者だな。」

筒井は苦笑いを浮かべたまま「君達は葉瀬中に入るのかな？」と聞こうとした瞬間、加賀のそんな言葉を耳にした。

「なんだよ。」

「お前の彼女かなんかは知らんが、大したもんだ。」

「えっ！ ちよっ！！」

「だろ？」

「えーーーーーっ?!」

彼女と言う言葉にあたふたとしているアカリに対して、ヒカルは当然と言うように答えた。

もっとも、ヒカルは「大したもんだ」と言う言葉に反応したのであって「彼女」の部分に反応した訳ではないのだが、勘違いして下さいと言っているような物だ。

佐為はと言うと、うんうん、と笑顔で頷いていた。こちらもヒカルと同じ言葉に反応したのだが……。

「けどな、お前はどうかんだ？ 後ろから偉そうにみちゃー居たが、実はへポインじゃねーのか？」

加賀は言葉を発しながらも幾分困惑していた。

俺は何を言っただ!? こんなチンピラみたいな言葉を並べて、ガキすぎるだろ!!!

加賀は自分でも意識しないうちに絡んでいたのだ。

それをしてしまったのは、加賀自身気付いていない嫉妬とヒカルの余裕を持った態度に対するイラだだった。

ヒカルは思いも寄らぬ加賀の物言いに数瞬固まってしまった。

佐為も驚いたのか、固まって加賀を注視していた。

アカリは怯えるように、佐為の後ろに回りこんで加賀を睨みつけている。何故ヒカルじゃないのかは謎だ。

「加賀!!!!!!」

そして、そんな中で一番に反応したのは筒井だった。
加賀の言葉に、この中で一番衝撃を受けていたのだが、それを上回る怒気でつい叫んでしまったのだ。

「ごめんね。この人は加賀って言って、本当はこんな乱暴な奴じゃないんだけど。」

ジロリと加賀を一睨みしてから三人組に話しかける。

「あ、いや。別にいいけど。」

「そう、良かった。」

筒井は、ほっとした。

楽しみに来ていてホストの所為で、気分が悪くなった状態で帰られてはたまらない。

「っは。」

それに対しても加賀は鼻で哂いを返した。

もっとも加賀は内心、頭を抱えて悶えていたのだが。

「加賀、いい加減に……。」

怒り露あらいな筒井。

加賀を本気でどうにかしようと、腰を上げた所で意外な声があがった。

「オーケー。了解。その喧嘩買った。」

その声はヒカルだった。
内心では。

そう言えば加賀との付き合いは初め喧嘩からだったかー。

と、遙か昔の記憶を掘り起こしていたのだが。

周りは、そんなノホホンとした雰囲気ではない。

アカリは青ざめているし、佐為もピシリと固まっている。

周りにいた客も散っていて、この場所だけ閑散としている。

当然、筒井も頭を抱えて碁盤に突っ伏してしまふ。

もっとも、この中で一番混乱したのは、加賀だ。

おいーーーーー！！　なんで買っただよガキンチョ！！

フザケンナー！！　と塔矢のお株を奪うように絶叫していた。
心の中で。

「それじゃ始めようか。」

落ち着いたヒカルの声。

その元を辿ってみると、筒井の反対側にあるイスからだった。

「「「？」「「「」

「あー。そう言う事ですか。」

佐為意外の誰もが困惑していた。

当然だろう。ヒカル意外の誰もが殴りあいの喧嘩を想像していた
のだから。

前世の記憶を持っている佐為だけが、正しくその意味を理解した。

「何やってんだ？」

「え？ 碁で勝負すんじゃないの？」

本気で疑問顔で問いかけてくるヒカルに、加賀は脱力してしまっ
た。

それ以上に安心していたのだが。

「そう言う事かよ……。」

「ん？ 他になんかあるのか？」

「いや、なんでもねー。筒井ちよつとどけ。」

「解った。」

両者が席に着く。

周りは皆一様に安堵していた。

アカリは涙目でほっと溜息をついているし、筒井も「よかった！」
と笑顔で喜んでいた。

遠巻きに見物していた老人も、戻ってきて観戦する体制に入っ
ている。

そんな中で加賀は扇子を開いた。

ツバ！！

と、言う音とともに「王将」と言う文字を誇らしげに構える加賀。

「そんじゃ少し生意気な後輩を捻ってやるかな。『あっ』と言わせ
てやる。」

ニヤリと笑う。

その笑顔？ 笑顔には自信と嬉しさが溢れていた。

「はいはい。それじゃ俺は即効で一刀両断にするかな。」
「ツケ。言ってるよ。」

ニヤリと両者が笑いあう姿は、どう見ても楽しげで、先ほどまでの険悪な雰囲気など欠片も見えなかった。

「俺が先番だな、精々長持ちしろよ。」

パチツと加賀の碁石の音が響いた。

それから、34手。

すでに勝負は決していた。

「……………おいおい。なんだこりゃ？」

呆れたような加賀の声。

「……………ツハ！！ えーと。投了？」

呆然としていた筒井の声も疑問系だ。

それもそうだろう。

ヒカルは一切、手加減しなかった。

もうバツサリブツサリ一刀両断だった。

結果。加賀の投了。

筒井と加賀が呆然とするのも解ろつ。

中学にしては強いと、自信を持って言える加賀が、わずか30余

手で勝てんと実感する。その実力差は目を疑うだろう。

しかも相手は小学生だ。

筒井など白昼夢でもみているのかと頬を掴っているほどだ。

「お前、院生なのか？」

「俺？ いや、院生はまだかな。」

「なるほどな。」

ふむ。と頷き、加賀は筒井の学ランをひっぺがした。

「ちょー！！ 加賀何するんだよー！！！」

「あーあー。うるせー。」

ヒラヒラと手で筒井を追い払う仕草をしながら、ヒカルにその学ランを投げつける。

ヒカルはと言えばポカンとした表情でその学ランを受け取る。

「筒井、これでメンバーが揃ったぜ。」

「はあ！？ 何言ってるのー！！！」

「大会のメンバーに決まってるんだろ。俺・お前・このガキだ。」

「小学生じゃないか！」

「だから、お前の学ラン着せて変装させんדרろっが。」

「えー！ー！ー！！！」

「良い案だろ？」

「ダ、ダダ、ダメに決まってるじゃないかー！！！」

「出たくないのか？」

「う…。」

「これを逃したら、大会出場はいつになんのかねー。」

「ぐう…。」

「このメンバーなら優勝も目じゃねーのになー。」

「ううう……」

「優勝したら、入部希望者も増えんだろうなー。」

「……………」

「あーあ。筒井君がそんなならヤル気なくなっちまうなー。」

「……かつたよ。」

「ん？　なんだ？　きこえねーよ。」

「解ったよー!!」

それで、いいんだよ。

そう言いながらヒカルに目を移す加賀。

本来なら、ヒカルの抗議もあると思っていたので些^{いなきが}拍子抜けしていたので、ヒカルに目をやったのだが。

ヒカルはと言えば。

額に手を乗せて天を仰いでいた。

「……………何やってんだお前。」

声をかけてもなにやらブツブツと声が聞こえるだけである。

内容はと言つと。

あーあつたあつた。かあさんキレるんじゃないか？　いや、でも日にちいつだっけ？

「来週の日曜だ。」

最期の部分を聞き取った加賀が律儀に答える。

それを聞いたヒカルは、涙目で佐為に振り返る。

それに対して佐為はコクンと頷くだけでジツとヒカルを見る。

「えーと。その大会はキャンセルとか……………」

「おいおい。俺の頼みを断んのかよ。」

弱気なヒカルの声に不遜に答える加賀。

筒井としては、強引すぎるやり方に不満だったが、先ほどの加賀の呪文が効いていて口を挟まない。

「はあ。しゃーないか。りょーかい、参加する。しますよ!!」

ツケツケツケと笑う加賀。

「ごめんねーと手あわせる筒井。

三人組と言えば、アカリからポコポコ叩かれているヒカルに、「やめろー」と頭を抱えているヒカル。それを微笑ましげに見る佐為という。訳の解らない状態になっていた。

「なんだありや?」

「さあ。でも承諾してくれてよかったよ。」

「ツケツケツケ。まあ、バレたら速攻失格だけだな。」

「つう。まあ、そうなんだけど。」

「しっかし、あれはつえーわ。」

「だね。」

「葉瀬に入っても部活はいらねーんじゃないか?」

「んー。僕もそう思うけど、指導暮くらいならしてくれそうじゃない?」

「カーっ! 情けないぞ筒井!!」

「いや、でもあれは無理だよ。」

「だな。」

「だよ。」

「集合場所と時間教えてくれない?」

話に割り込んできたヒカルに視線を向ける筒井と加賀。

「あー。時間は来週の日曜10時。場所は海王中学だ。」

「わかった。それじゃもう帰る。」

「おう。時間遅れんなよー!!!」

「加賀こそ。」

「本気で生意気なガキだな。オイ。」

ヒカルの捨て台詞にフルフルと震える加賀をよそに、筒井は夢心地だった。

念願の大会出場である。

だが、それよりも彼等の存在の方が興味を引く、三人連れ添って歩く後姿を見てもただの子供なのに。

棋力は抜群。雰囲気は親子風味。

なんとも不思議な組み合わせ。

アカリはヒカルにそっぽを向いて佐為の腕に抱きついていて、佐為はそれをみて笑っている。ヒカルもヒカルでそわそわして落ち着きがなく、悩んでいるようなそぶりも見える。

不思議な組み合わせだ。

胸中でそんな事を思いながら、筒井は日曜を楽しみになっていた。

そして場面は進藤家に移る。

「あ、かあさん。来週の日曜に用事が入ったk……っ！……！」

ドンツとヒカルを押しつけて母・美津子は佐為に抱きついた。

「彩ちゃん！？ 彩ちゃんには行かないわよね？」

抱しめつつも顔を覗き込む美津子。

「いえ、ヒカルがどうしても着いてきて欲しいと……。」

目を逸らしながら、悲しさを乗せた呟き。

その瞬間、美津子の全身が震えだした。

「……ヒカル……。」

「うわ。そりやないだろ。」

そう、全身に滾る様な怒りによって美津子は震えていたのだ！！

「ヒカル！！ 一人で行きなさい！！ 私と彩ちゃんとあかりちゃん
はデパートに行くからね！！」

「あー。」

「あー。じゃありません！！ 日曜を私がどれだけ楽しみにしてる
か解ってるの！？ 彩ちゃんを弄れr……彩ちゃんの服を選ぶの
は日曜しかないのよ！？」

「……。」

「こんなにかわいいのに！！ まだ42着しか着せ替えてないの
……！！ もっと楽しませなさい！！」

「……かあさん、本音出てるから。」

呆れ顔のヒカルと、烈火の如く怒る美津子。

ヒカルが佐為を連れ出す度に行われる儀式のようなものだが。
これは、いつもある少女の一言で終る。

「お母さん。ごめんなさい。今度一緒にいきましょっ？」

5話・海王中1回目

葉瀬中での出会いから数日。

ヒカルと佐為、あかりは海王中学校に訪れていた。

「相変わらず、葉瀬中とは比べ物にならないな……」

壮大。と言うほどではないが、それでも葉瀬中学校に比べ、施設も充実した海王中学を見てのヒカルの言葉である。

「そうですね。しかし、葉瀬には葉瀬の良い所がありますよ」

それに対し、同意しつつも、にこやかに葉瀬を援護する佐為。

「うーん。私は葉瀬の方がいいかな？ あっちの方がノンビリできそうだしね」

佐為の腕に抱きつきキョロキョロと周りを見ながら口を挟むアカリ。

3人は加賀との約束通り囲碁大会のため海王中学に来ていたのだ。つた。

本来ならヒカルだけが来ればよかったのだが、佐為とアカリが同行していた。

これには大した理由はない。佐為が同行する事は葉瀬からの帰宅時に本人に聞いているので問題ない。

ただ、今日。つまり大会の日は、母・美津子と佐為それにアカリの三人で買い物に行く予定があったらしいのだが、それは佐為の卑怯にも巧みな話術でキャンセルするのをヒカルの責任にされ同行が

決定した。

それを察知してたアカリも予定が無くなった事から着いてきたのだ。

ともあれ、着いたのは良いが加賀と筒井がみつからない。ならしょうがない。暇つぶしに3人で校舎を散策していたのである。

「まあ、比べるのはあんまり好きじゃないけどさ」

「そうですね。それにあの中学はヒカルにとって特別な場所でもあるでしょう?」

その佐為の言葉にはヒカルも同意だった。

あの学校は特別だ。

筒井や加賀は長年に渡って自分を応援してくれた。

三谷はあの後プロの棋士にはならなかった物のアマとして活躍し、プライベート・囲碁共に気軽に話せる関係にまでなった。

違う学校に行ったとして、学友とそれほどの関係を築けたか? そう問われると疑問が残るのだ。

まず囲碁部がある事が前提になる上、ヒカルは途中からプロ棋士となり、学校の行事などに参加する事が少なくなった。

そんな状態で友達を作るのはかなりの重労働だろう。

そして、そんな気を使う事が出来る程当時の自分に余裕はなかった。

そんな中で友人と立派な先輩に巡り合えたのだ。だからあの学校は自分にとって特別なのだ。

「そ、だな」

ゆえに嘸締めるようにヒカルは頷いた。

「ん？ ヒカル。あの学校に何かあるの？」

疑問の声の主はアカリだった。

当然の疑問だった。ヒカルと葉瀬の接点など今まで一つもないのだから。

「んーまあ、その内話す」

しまった。そう思いながらヒカルは答えた。

「ん。わかった」

ニコリと笑い、学校の施設に目を向けるアカリ。

それを見てヒカルは僅かに胸を痛めた。

「その内」その言葉を使う事が多くなったのは何時からだったか。子供の頃に使っていた「その内」と言う言葉。

そして今使った「その内」と言う言葉。

その言葉の指す意味が変わったのは、一体いつからだったか。

その言葉の重さが変わったのは、いつだったか。

唐突にヒカルは思った。

アキラに事の真相を話せていないな。と。

遺書を残してはいるが、自分の口から伝える事は遂になかった。

後悔の一つだな

少し先を歩く佐為とアカリを見ながらそんな事を思った。

「あ。ヒカルー！ 筒井さん居たよー」

教室の一つを覗き込んでいたアカリがヒカルに笑顔を向けてくる。それに少し胸を痛めながら「おー居たかー」と返事を返し、ヒカルは教室へと足を進めた。

教室に入った3人を迎えたのは、不敵に笑いトーナメント表を見る加賀と、囲碁の定石本を熱心に読んでいる筒井だった。

「おう。来たかガキンチヨ共」

ニヤリと笑い加賀は3人を手招きする。

傍らに居る筒井はまだ気付いて居ないのかパイプ椅子に座り込み、パラパラと本を捲っている。

「ちわー加賀」

シユタツと片手を上げてヒカルは加賀の元へと向かう。そして目にした筒井に頬を引き攣らせた。

そう言えば筒井さんって定石本片手に試合してたんだっただか……

「……筒井さん」

はあ、と溜息をつきながらヒカルは筒井の方へと向きを変えた。

「このガキ……俺は呼び捨てで筒井はさん付けかよ」

「こんにちは。加賀」

「こ、こんにちは。加賀……さん」

加賀が赤面しそんな笑顔で挨拶をする佐為。

アカリは怯えているのか、少しドモっていた。

「お、おー。お前らも来たのか」

僅かな動揺を押さえ、意外そんな表情で返す。

「ええ。私も少し興味があったので」

「えっと。私は暇だったからです」

「まっ。いんじゃないか。流石に大会に参加は出来ないけどな、見るだけでも勉強になんだろ。そっちの嬢ちゃんはならねーだらうけど」

前半はアカリに、後半は佐為に向けた言葉だった。

アカリは笑顔で頷いた。

「いいえ。確かに実力云々では私の足元にも及ばない棋力の者達ばかりでしょう。しかし、そのような者達が打ち出す一手は思いもよらない手となる事もあるのです。十分に見る価値がありますよ」

「そんな物か？」

「ええ。この世に無駄な一手など存在しません」

加賀は釈然としない思いを抱きながらとりあえず、そんな物なのか、と納得した。

そのまま筒井と話しているヒカルを見つけ、そちらに歩いていった。

佐為の言葉にウソは一片も存在してない。

佐為は真実あらゆる一手に価値を見出している。

例えばそれが悪手だとしても、それはその一手を打った者を更なる高みに導く。

その最大の例は伊角だろう。

彼はヒカルが院生にならなければ楽々とプロの道を進んだだろう。

だが、あの対局なくしてヒカルやアキラと鎬を削るような碁を打つ伊角は生まれなかった。

あの挫折があったからこそ伊角は高々と舞い上がる事が出来たのだ。

それに、と佐為は思う。

この場所でヒカルが言った言葉を思い出す。

今でも佐為の中で輝く、天啓のような、あの言葉を。

『遊んでるよ』

碁盤には九つの星があるだろう？

ここ、宇宙なんだ

そこにさ、石を一つ一つ置いていくんだ

星を一つ一つ増やすようにさ

どんどん、宇宙を創っていくんだ

まるで、神様みたいだろ

俺は神様になるんだよ

その言葉にどれほど自分が感銘を受けた事か。

ヒカルは全く気付いていないだろう。

正に晴天の霹靂^{へきれき}だった。

研鑽を重ねた一手。それも良い、素晴らしい一手だ。

しかし、己の望むがままに勝敗に拘る事無く、己が望む場所へと放つ一手。

それもまた素晴らしいのだ。

学べば学ぶほど、歳を重ねれば重ねるほど、打てなくなる一手。それが当時ヒカルの打った一手だった。

それは少し囲碁を学べば誰がみても呆れるような一手だったが、それでもその一手は佐為にとって万金の価値があった。

その時、佐為は強く思ったのだ、この子を導かなくてはいけない、と。

その結果は見るまでもなく明らか。

ヒカルは佐為の手から飛び立ち、何者も寄せ付けなほどに高く舞い上がった。

昔を思い出し、しばし呆けていた佐為だったがアカリに袖を掴まれ、そちらに目を向けた。

「どうしました？」

「なんだかボーってしてたから気になって」

心配気に自分を見てくるアカリ。

それ見て佐為は頬を緩ませ、頭を撫でた。

「なんでもありません。少し考え事をしていただけですよ」

微笑みながらの言葉にアカリは少し安心したのか微笑みかえす。

「そっか。でもやっぱり彩ちゃんも参加したかった？」

「そうですね。欲を言えば」

「やっぱり。来年は参加出来るといいね」

「ええ。その時はアカリも一緒にでましようね？」

「うん!!」

ニコリと笑い合い二人は筒井と加賀、そしてヒカルが言い合いをしている場所へと向かった。

「だー！筒井!! こいつの言ってる事は本当か!？」

「え？ うん。その予定だけど？」

定石本を胸に抱え、何当然な事言ってるの？

そんな感じで答える筒井。

「バカかお前は!! いや!! バカに違いない!!」

「いや、まあ。少しズレてるとは思っけど」

キョトンとした筒井。

バカだと連呼する加賀。

呆れたように息をつくヒカル。

何が起こっているか、説明しよう。

ヒカルが筒井の所へと向かい、唐突に言い放ったのだ。

「筒井さん。試合中も本見てるつもりじゃないですよね？」

「え？ 見るけど？」

「アア。ヤッパリ？」

「うん」

「うわー、どうしようこの人……」

そう悩んでいる所に加賀が来て、ヒカルに聞いた。

「何、悩んでんだ？」

そして答えた結果が上記の怒声だった。

まあ、当然の結果だろう。

「お前はそんな事してるからよえーんだ！！ 定石なんか変化したら意味ねーだろうが！！」

「いや、でも不安なんだよね」

弱々しく笑う筒井。

しかし、そんな表情を見ても加賀の怒り、と言つか呆れは止まらない。

「アホ！！ お前にはんなもん必要ねーっ！！ 今・すぐ・捨

てるー!!」

「ええー!!」　む、無理だよー!!」

「無理もクソもねーっ!　手放さねーんなら俺は降りるぞ。今すぐ棄権してもかまわねー」

「ちよつ。加賀、本気で!？」

「ああ。どうする?　大会参加か、それともここで棄権かだ。」

「うううう……」

「天秤にかける時点でお前はオカシイッ!!」

なんだかんだで仲いいんだよなー。

ヒカルは胸中でそんな風に思いながら見ていた。

「何事ですか?」

「何かあったの?」

背後からの声にヒカルは振り向いた。

相変わらずアカリは佐為にベツタリだった。

何故アカリがこれほど佐為に懐いているのか、ヒカルには解らない。

ただ、なんだかもー凄いベツタリだった。

ここに来る時も腕を組んでいたし、登下校でも腕を組んでいる事が多い。

佐為も大概ワンコ属性だが、アカリもそんな感じのようだ。

「いや、筒井さんが定石本読みながら試合するつもりらしくて、なんとか止めさせようとしてた所」

うううと唸る筒井とアホか悩む事じゃねーだろ!!　と叫ぶ加賀。佐為とアカリはそれを見て苦笑いしていた。

佐為は懐かしそうに。

アカリは気持ち解るなーってな感じで。

「まあ、規則には触れないけど、見栄え悪いし、意味ないし。なんとか加賀が説得中。まあ、もう脅迫まで行ってるけどな」

「確かに」

そいしてポヤポヤと三人で他愛ない雑談を交わしていると、筒井もようやく諦めたのか、涙しながら鞆に本をしまっ姿が確認できた。次いで加賀がこちらに向かってくる。

「あのヤローどんな脳ミソしてんだ……」

疲れたように愚痴を零す加賀。

それを見て哀れになったのかヒカルが声をかけた。

「加賀おつかれ」

アカリは苦笑いしながら加賀を見ている。

声を掛ける勇氣は、まだなかった。

「おう。しっかし、お前が気付いてくれて助かったわ」

まさか定石本みながら試合するつもりだったとわ……

加賀は荒々しくパイプ椅子に座り、腰を曲げて項垂れた。

しかし、何かあったのかバツと体を上げてヒカル達を見上げた。

「どっただの？」

ヒカルは怪訝そうに聞いた。

「いや、な。お前らの名前しらねーわ」

それを聞いたヒカルは少し顔を歪め、誰にも気付かれない内に呆れた表情を見せた。

「そう言えばいつてなかったか……」

「進藤 彩です」

「あ。私は藤崎 あかり」

ペコリとお辞儀する佐為。

それに釣られるように自己紹介し会釈するアカリ。

「んで俺が進藤 ヒカル」

グツと胸を張るヒカル。

それを見てアカリは呆れたように頭を振り、佐為は苦笑いを零した。

「ふーん。俺は加賀 鉄夫だ。つか姉弟か？」

「まあ、ちよつと前からだけど」

「ほお。まあ、色々あるみたいだな」

「まあね。つてかさ、彩のが姉だと思ってるの？」

「違うのか？」

「……っ」

「いえ。私が姉です」

「だよ「俺が兄だろ!」……な」

「何言ってるんですかヒカル!! 私がどれだけ貴方より年上だと?」

なんとも下品な笑い声だったが、それだけヒカルがウケタ証拠だった。

ヒイヒイと息を切らし、そしてまた笑う。

「……おい」

そこまで笑われ、加賀はちょっと不機嫌だった。

まあ、自分がなんとも馬鹿な質問をしたのかは承知していた。

この爆笑から間違っていたんだろう。

それでもだ。自分が見た時は常に佐為にひつついていたし、笑い合う姿など良からぬ想像をしてしまう程に親しみを込めた表情だったのだ。

もつともそれを筒井は家族のようだと思った。

それを加賀は恋人同士のようだと思った。

ただそれだけの違いだった。

それほど近くに見えるほど満ち足りた笑顔だったのだ。

「ゴラ、いい加減にしたがれ」

「ヒフ。ゴメツ、ゴフツゴホツ、ヒイヒイ、ブフウ、やばい、腹筋が、クヒヒヒ、あぶ、酸素ふぁ」

ヒカルはちよつとヤバイかった。

咳き込むのもそうだし、明らかに酸素不足な感であった。

もつともそこまで笑えば目立つ。

少し遠くにいた筒井がギョツとして近寄ってくるし。

佐為とアカリも怪訝そうにして、それでも二人でヒカルの背中をさすっていた。

それを遠巻きに他校の生徒が見ていた。

「……………」

加賀はムツツリとしていた。

腕を組んで不機嫌そうに踏ん返り返っているが、僅かに頬が赤かった。

さすがの加賀でも恥かしかつたらしい。

「ちょ、ちよつと進藤君大丈夫？」

筒井はどうしていいのか解らず、オロオロとヒカル達の周りでウロウロしている。

「ヒカルどうしたんですか？」

「大丈夫？」

笑いの収まってきたヒカルに佐為とアカリが心配気に声を掛ける。

「ふひひ、だ、だいじよ、大丈夫」

もはやヒカルじゃねー。

佐為とアカリがそう思ったかは定かではないが、より心配して顔を覗き込んでいる。

「ハアハア、やべえ、死ぬかと、思った」

落ち着いてきたヒカルをパイプ椅子に座らせ、佐為は屈み込んでハンカチでヒカルの額の汗を拭いていた。

「ああ、ありがとう彩」

「いいえ、当然事ですよ」

その言葉を切欠に微笑み合う、この二人も当然のように仲がいいのである。

それを見て困惑するのは加賀だ。
今更ながらに不思議な構成だと気付いたのだ。
単純に考えるなら簡単だ。

ヒカルが二人を待らしている。それだけ。
だが、この3人はそんな邪推をするような笑顔をしない。

なんだつつうんだ……

「それでヒカルなんでそんなに笑ってたの？」

ヒカルの背を撫で付けながらアカリが当然の疑問を口にする。
心配そうに見ていた筒井もそれが気になっていたので、同意するように頷いていた。

「いや、それが、さ、ぶ、くふふ」

笑いが込み上げてきたのか再びヒカルの体が震える。
が、それを聞いて気が気でないのは加賀だ。
自分が馬鹿な事を聞いたのだ、しかも本人にバレそうだ。ヒカルはこれを黙っとくような奴にみえない。

「だ、ちょ、おい、進藤弟ちょっと……」

口止めしとこうと加賀が声をあげたが、一歩遅かった。

「彩とアカリがさ、百合な関係かって、加賀が、ぶふっ」

言いやがった……

加賀は半ば絶望した。

頭の中はヤベエ、ヤベエヨナ、ヤベエツテ。

それしかなかった。

それに追い討ちを掛けるように筒井は赤面して加賀を睨みつける。

「なっ！！！」

佐為も頬を染めて加賀を睨み。

「え？ 百合って何？」

アカリはキョトンとして加賀を見ていた。

アカリの反応は加賀の罪悪感のような物を刺激しまくった。

こんな純真な反応を返されると、めっちゃ痛い。なんか汚れた気がしてくるのだ。加賀は死にたくなった。

「アカリ、こっちに来なさい」

佐為はアカリを手招き、抱きかかえ、加賀から距離をとった。

「え？ え？ 彩ちゃん？」

「アカリ、今の言葉は忘れなさい、後あの獣には近寄っちゃダメですよ」

「え？ 何で？ え？ 獣？」

「ええ、あれは変態です。畜生にも劣ります。何て目でアカリを…

…」

加賀は死にそうになっている。

「加賀！！ 何を、全く何考えてる！！ あの子達がそんな風にみえるなんて……加賀！！」

筒井は赤面して攻め立てるが、何を言ってるのか自分でも支離滅裂だった。

とりあえず加賀は瀕死だった。

「いやー、まさか加賀があんな事言うなんてな。加賀も年頃だったって事かー」

ヒカルの無慈悲な言葉が加賀を貫いた。

加賀のHPは0になった。

「アカリに近寄らないで下さい」

「彩ちゃん、どうしたの？」

「あれは、哀れな子です、近寄ってはダメ、ほらこっちですよアカリ」

「え？ う、うん」

佐為の言葉は加賀を粉々にした。

アカリの心配そうな視線は加賀を再生させそうになった、が。

可哀想……あきらかにそんな目を向けられ、加賀はもう欠片も残っていない。

「それでは、1回戦を始めます。選手は席に着いてください」

……大会、スタート。

5話・海王中1回目（後書き）

投下！。

詰め込みすぎた感が否めない…

あと、リアルが未だ騒々しい…煩わしいです。

故に5部はまだ残しておきます。

それと囲碁の勉強ですが、定石や専門用語など習得はあきらめました。

正直、奥が深すぎる。何百、何千年の歴史を私は軽んじていたと改めて知りました。

囲碁は奥深く、幅広く、私の脳ミソでは仕事と平行しての習得は本当無理です。弟に聞いて見ましたが、「1ヶ月で解る囲碁の基礎？

舐めてんの？」とありがたい言葉をもらいました。

不快な場所がありましたら感想・メッセージで指摘していただけるとありがたいです。

6話：海王中2回目

大会が開始された。

各中学の生徒は係員の声にしたがい席に着いていく。

そんな中、声に反応する事も無く屍のように椅子に座り込む一人の生徒がいた。

彼の名は加賀 鉄夫。

佐為からは獣と呼ばれ、変態とも言われ。

アカリからは同情され。

ヒカルにはからかわれ。

筒井からは馬鹿を見るような目で見られた。

彼の名は加賀 鉄夫。

彼は試合前にも関わらず意気消沈し半ば、死んでいた。

「なんかさ、加賀ショック受けすぎじゃないか？」

ヒカルは筒井に勧められた副将の席に座る。

ちなみに筒井は三将の席にすでに座っている。

故に大将は加賀なのだが。

上記のように屍と化しているため、動かない。

係員が加賀に声をかけているが、それも聞こえているのか聞こえていないのか。

ボウつと地面を眺めている。

「いいんです。あのような変態だとは思っていませんでしたが、本

性が割れたのならアカリの半径3mには近づけさせません」

ヒカルの背後に立っている佐為の言葉だった。

ビクツと加賀が震えている事から声は届いているようだ。

しかし、佐為の言いようはキツイが仕草は中々微笑ましく、腕を組み加賀から顔をそらすように横を向いている。

典型的な【私、怒ってます】な姿勢だった。

「彩ちゃん…ちょっと怒りすぎじゃないかな？ 何ていったのか解んなかったけど、ほらそんなふうになるのは…その…彩ちゃんらしくないよ」

佐為の隣でチラチラと加賀を見ながらのアカリの言葉。

それに佐為は過剰なまでに反応した。

「あかり！！ ああ、なんて……獣の身すら案じるなんて……それだけに加賀鉄夫…許しません」

そんな事を言いながらハグハグを開始した。

「お前等な、もうちょっと静かにしろよ……」

「なんか加賀の言ってた事もあながち…ひうっ……いや、加賀ダメだなーダメッ」

呆れたように溜息をつくヒカルと、加賀の意見に少しだけ同調しそつになつた筒井。

もっとも筒井は佐為に睨まれ途中で意見を翻したが。

「つても加賀来ないと始まんないしな、どうしようか」

「そうだね。加賀半分くらい魂なくなつてそうだし、どうしようか」

ヒカルと筒井は抱き合う佐為とアカリを横目に、加賀の様子を伺う。

未だ項垂れているのだが、少し回復したのか係員の男性と話をしていた。

ボソボソと口を動かし、何故か佐為を指さした。係員はその先を見て少しばかり驚いたような表情をみせる。

それに対して、佐為は加賀の視線からアカリを庇うように位置を入れ替え、グルツと首を回してジツと見つめた。

それに加賀は体をビクリと震わせ肩を落す。

その様子を見た係員は同情したかのような視線を加賀に向け、ポツと肩に手を乗せる。

そのまま何か話しかけ加賀が頷くのを見ると、その係員は苦笑いを零しながら年配の人の下へと歩いていった。

それを見送った加賀は「よしっ」と声を出し腰をあげるのだった。

「なんか復活したっぽい」

「そうだね、なんでか復活しちゃったみたいだね」

此方に歩いてくる加賀。

そに対してジリジリと距離を離す佐為。

アカリは困ったような顔をしながらも佐為の成すがままにされている。

「おい、進藤の姉の方」

加賀にしては覇気の無い声だったが、致し方ないだろう。

ともあれ、椅子の横でジツと佐為の目を見ながら声をかけた。

声の覇気のなさに比べ目は真剣だった。

「あーその、だな……」

尚もジツみていた加賀だったが、耐え切れなくなったのかプイッと横向き、

「さつきは、下らん邪推して悪かった」

そう謝った。その横顔が僅かに赤らんでいるのは見間違いでは無
いだろう。

それを見ていた佐為は数秒、無表情に加賀をみつめ。

「今回はいいでしょう。でも2度目はないですからねっ」

シブシブ許すのだった。

「おうつ。ありがとな」

それで調子を取り戻したのか、加賀は元気よく返事をかえした。
試合前に気分も良くなり、加賀はやつと席に着こうとしたのだが、
我等が副将と三将は顔を突き合わせてこんな事を話していた。

「うわっ加賀ってツンデレ？ 長く一緒にいたけど気付かなかった
な」

「え？ あれがツンデレ？」

「だとおもうよー」

「へえ。なんか意外だな」

「そうだよな。なんか加賀って強気って言うのか自信に溢れてる感
じがあるからね、ツンデレってのはちよつと想像が……あれ？」

「なに？」

「あ、いやね。元々そう言う人がツンデレ属性になる素質があるん

じゃないのかと思って」

「筒井さん……属性って」

「あ、ボク別にマニアとかじゃないよ？ 萌えとか意味解らないしね」

「そ、そう。ま、まあアレだよな、加賀もちよつとは異性の事気にしてるって事だよな」

「まあ、そうだね。そうじゃなきゃ照れたりしないだろうし」

「謝るのが恥かしかっただけかもしれないけど」

「ああ。加賀ならありうるけど、ボクは謝るのって恥かしい事じゃないと思うけど」

「俺も別に恥かしくないけどさ」

「あ、そう言う恥かしさがデレなのかな？ いやツン？」

「……ごめん筒井さん。俺ついてけない」

こいつら……マジ殺す……

とりあえずヒカルと筒井の頭を叩いておく加賀であった。

1回戦スタート。

したのだが、別段珍しい事も起きなかった。

ヒカルと加賀が他を寄せ付けぬ強さを示し。

加賀は10分で中押しで勝利。

ヒカルに至っては開始5分で相手の心が折れた。

筒井も危なげなく勝利。

3人そろって勝利を収めたのだった。

佐為とアカリは途中まで海王中の対局を見ていたのだが、アカリ

がヒカルの対局が見たいと言い出し。アカリを溺愛している佐為がそれに逆らうはずも無く、その後は葉瀬の対局を見ることに終始していた。

その対局が終わった後も別室にて5人で棋譜を並べたり、対局してみたりと有意義に過ごした。

2回戦

これもまた問題なかった。

初めの内から海王の生徒が棋譜を取っていたようだが、それでもなんの出し惜しみもせず、三人は勝利した。

もつとも2回戦が終る頃には佐為が「ううう。私も……らいねんって長いです…うう」と愚図りだした。それをアカリがオロオロと宥めに掛かっていた「あ、彩ちゃんつてば、大丈夫だよ、私も一緒だし、ね。それに1年待たなくても入学して少ししたら大会もあるよ。人数なら一緒に集めよう？ あ、あわあわわわ。な、泣かないで彩ちゃん」「うう…ながいです」そんな感じ。

そして昼食。

大会に出場する他校の為に解放されている教室で5人は昼食を取っていた。

各々持参した弁当を食べていたのだが、その食事中佐為が大変だった。

ずっとヒカルの背後に張り付いていたのだ。

背後からガバツと負ぶさるように張り付き、首筋から手を伸ばしてヒカルの胸元でブラブラとさせたり、ヒカルの頭の上に顎を乗せて「あうーあうー」と声をあげて頭をユラユラしてみたり。

とにかく奇行が目立った。

「注目を集めるのだが、ヒカルは瓦解せずといった様子で食事を続けた。」

「たまに「私も打ちたいです。ヒカルー」と声がかかると、それには「ん、ちょっと待って飯食べ終わったら打とう」と返す。」

「それに対して「ちがいます。団体戦したいです」と佐為は反論。それには「ん、後半年我慢な」と返す。」

そして、手をブラブラ。頭をユラユラ「むーあーうー」。そのループだった。

初めの方は佐為の行為に唾然とした加賀と筒井だったが、ループが三回目に入った頃には対処方法を探して目を彷徨させたのだが、もう一人の片割れであるアカリがその奇行が当然と言ったふうに弁当を食べているのを見て決めた。

「とりあえず無視しよう。そう決めた。」

そして食休憩中に筒井がアカリに話を振った。

「ねえ、藤崎さんアレどうなってるの？」

指を指す事はせず目線で促した。

「え？ ああ、アレ？ アレはね、んーなんて言うのかな、彩ちゃん禁断症状と言うか」

すでに佐為のあの行為はアカリにとって日常茶飯事だった。ゆえに説明しろ言われると聞えは悪いがコレしか思いつかなかった。

「禁断症状？　なんだそりゃ？」

聞き耳を立てていた加賀も話しに加わる。
加賀の疑問に同意なので筒井は頷く。

「彩ちゃんはね、囲碁が好きなのとてもね。それですつと囲碁が打てない時とか、自分が打ちたいような状況を見ると、ああなるの。かわいいでしょ」

フンワリと微笑むアカリ。

「……かわいい、のか？」

「……ごめん。解らない」

フフフ。と微笑むアカリを見て二人は思案顔でヒカルと佐為をみた。

「ヒカルー」「ん、今度はなんだ？」「その唐揚げおいしいですか」「……ほれ」パク。モグモグ「おいしいです」「かあさん唐揚げ作るの上手いよな」「実は私が作りました」「マジで！？」「う・そ」「……だろうよ」「あーうーあうーうー」「……」「私も打ちたい」「団体戦だろ？」「はい」「我慢な少しだけだから」「うーうー……はい」

かわいいかどうかは知らんが、二人は和んだ。

.....
決勝戦スタート!!

6話・海王中2回目（後書き）

短めで、このくらいの量ではやっぱり少ないですかね？

7話・海王中3回目

進藤ヒカルにとって「この大会」は何であるか？

そう問われればヒカルは即座に答える事が出来る。

分かれ道だな。と

初めの分かれ道は佐為との出会いだったかもしれないが、自分にとって初めて暮と真剣に向き合った場所は何処か？ と聞かれればこの時、この瞬間以外ありえない。

故にここは分かれ道と表現するしかない。

もし、この場所で加賀に発破をかけられなければ？

もし、この場所で佐為の導きを受けなければ？

もし、この場所でアキラの真摯な言葉と視線を受けなければ？

そんな「もし」が起こっていれば、暮神と謳われた自分は居なかっただろう。

そう言いきってしまったるほどに、過去この場で打たれた一局には価値があった。

また同時に思うのだ。

そんな「もし」が起こっていれば、自分はずっと佐為と一緒にいられただろう。と。

坦々と佐為の指示に従い。

自宅では少し上達した自分と佐為が検討をする。

そんな未来もあったのかも知れない。

だが、そんなのは自分も佐為も、生きてるとは言えない。

たまに考える事があった。

寅次郎はどのように感じて、己の人生を佐為に捧げたのだろうか、と。

自分を殺してまで佐為の為に人生を捧げたのは何故なんだろうと。

年老いて、自分が行き着いた結論は、「信仰」だった。

佐為と言う天才棋士に巡り会った、それをあたかも仏の導きや神の啓示、そんな物だと解釈したのではないか。

そして寅次郎がそう思ってしまったのも仕方の無い現象が、佐為そのもの。

碁精だと見紛う容姿、天下一と言って不足無い実力。

全てが神秘の発露のように思えただろう。

そして佐為の実力を知り、おそらく 完膚ないほどに 寅次郎は、折れたのだろう。

よって、こう思ったのではないだろうか、

己の人生はこの人の為に用意されたものなのだ。

と。

その時の寅次郎の思いは解らないが、

それはどれほどの 絶望、だっただろうか。

それはどれほどの 歓喜、だっただろうか。

知る由もないが、実力に魅了され、信奉し、捧げてしまったのだ。

今際の際の言葉がそれを証明している。

もしかしたら自分もそうになっていたかも知れない、それが寅次郎の一生だったのだろう。

と、そこまで考え、ヒカルは現実逃避より帰還する。
肩に掛かる重みと、頭に当る硬い感触。

「はうー、うーあー、あー」

呻き声。

ヒカルは呆れるように溜息をつく。
実はヒカルはすでに対局席に座っている。
にも関わらず、佐為はいまだに唸っている。

会場に入る時もそうだった。
食事が終わり、皆で移動する時も佐為は背中から離れなかった。
仕方なくオンブして移動したのだが、椅子に座る一瞬を置いて他に背中から離れる事はなかった。

移動中の生暖かい視線や、剣呑な視線は忘れたくても忘れられない。
アカリは苦笑いして見守るだけだし、筒井と加賀は遠巻きにニヤケて観察するだけ。

もつとも、

まあ、仕方ないか。

と思つてしまう自分もいるのである。

依然はそこが定位置のような時もあつたし、佐為において暮が打ちたくても打てない状況は苦痛だろうとも思うからだ。

ゆえに出来るだけ、好きにさせておいたのだが、流石にソロソロ時間が迫っている。

対面にいる海王の生徒も呆れたような、妬むような視線を送ってきている。

ヒカルはもう一度溜息をして、佐為に声をかけた。

「いい加減、治まれって」

返答は、

「……う、打ちたい。半年は長いのです」

懇願……。

「……長い、枕元に立ってしまいそうくらい長い、ヒカルです。あれですね、好きな子を苛めてしまう男の子特有の病気ですね」

ではなく控えめな恨み言だった。

いや、打てないのは俺の所為じゃないだろ？ とヒカルは内心思いながら苦笑いする。

そんな時、勇者が現れた。

「おいおい。進藤姉、ちつたあ我慢しろって。もう少しで始まるんだ、こいつが緊張するなんて思つてもねーが、流石に決勝なんだ集

中したいだろーよ」

加賀だった。

純粹にヒカルの事を思つての発言ではない。

周りの目に耐えれなくなり、仕方なく発言したのだ。

が、

「黙りなさいロリコン」

返答は苛烈だった。

眼も向けず、一瞬、無表情になり言葉を発する佐為は、控えめに見ても怖い。

その後、また表情をとろけさせヒカルの上で呻き始めるのだが。

周囲で内心、加賀を褒め称えていた者達も「え？ まじで？」

そんな感じの眼を加賀に向ける。

加賀は口をだらしなく空けたまま固まる。

一泊を置いて慌てて周囲を見回し。

蒼白になりながら叫んだ。

「違つつての！！」

必死に否定する所が余計に怪しい。

もっともロリコン云々で加賀を攻めるのは些か苦しい。

加賀の歳でロリコンと言う事は、小学生低学年層を対象にしか見れないと言っているような物なのだ。

中学生でそこまで人間として終っている者は珍しいだろう。

そんな感じで加賀が必死に弁解し、注目を集めている間にヒカルは佐為をひっぺがした。

次いでアカリを呼んでその背中に貼り付ける。
非難がましい目でヒカルを睨んでいた佐為だが、アカリが「よしよし。彩ちゃん、大丈夫だよ。帰ったら嫌と言うほど打とうね。それに団体戦も一般の所でしようよ、きっと楽しいから」と声をかけられ、ほにゃつと顔を緩ませてアカリを抱しめ始めて落ち着いた。

ヒカルは乱れた髪を整えつつ、加賀を観察する。
もう可哀想なくらいに顔が赤くなったり青くなったりしている。

「あのさ……」

溜息をつき、加賀の援護の為に口を開いた瞬間。

「これより本大会の決勝戦を開始します！！ 皆さんお静かに願います」

「あ」

多分だが、あの係員は加賀のために、ほんの少しだが開始を早めたのだろう、とヒカルは思う。

あの人は加賀を慰めていた係員だったから。
ただまあ、フォローしようとした所にこれではタイミングが悪すぎる。

現に加賀を可哀想な眼で見て去っていく人が多すぎる。

これから会う事もないだろうが、あの人達の中で加賀は変態として記憶されていくのだろう。

そう思うと流石のヒカルも不憫に思えてくる。

「加賀、大丈夫だって」

だから励ましのつもりでヒカルは声をかけた。

「社会的に死んでも出来る仕事って割とあるからさ」

加賀の体が崩れ落ちた。

ドスンと椅子に座り、項垂れて何か呟いている。

なんでだ……。俺はわるくねーだろ。大体なんで進藤姉は俺をここまで……。百合か？ あの言葉がダメだったのか。許してくれたんじゃねーのかよ。鬼門か俺の鬼門兄弟か。葉瀬に来たら俺の人生終るんじゃ……。いや、挽回できるはずだ。俺は負けねー。誰にも負けねー。なんだよロリコンってちくしょう。言ったもん勝ちって奴なのか。クソ。納得できねー。

確かに加賀にとって佐為は鬼門かもしれないなー。

などと思っている内に、試合が始まった。

加賀も切り替えたのか、ニギル時の表情に鬱としたものは見えな
い。

ちなみにこの間、筒井は一人で傍観していた。

加賀が狼狽している間も、佐為がヒカルにじゃれついていた時も、筒井は関わらなかつた。

何故だか解らないが、佐為に逆らってはいけないと本能が訴えていたのだ。

脳裏には睨まれた時の佐為の表情が浮かんでは消え、浮かんでは消えていたので、その影響だろう。

「やっぱり、勘って大事なんだ」

筒井はポツリともらした。

8話：海王中（了）

決勝が開始され、5分間。

ヒカルは一手も打たなかった。

目を瞑り、僅かに笑みを浮かべて熟考していた。

考えているのは碁の展開の仕方ではない。

誰に向けての碁とするか、である。

単純に全力で打てば、確実にヒカルが勝つ。

だが、この場この時この瞬間。確かに自分の転機となった場所。

すこし欲が出たのだ。

自分も、打ってみたい。

佐為のように、誰かを導く為の一手を打ってみたい。

だが、それでは相手はどうなる。

教材ではないのだ。

なら、対局者も自分が導きたいと思った誰かも、何かを感じる碁にしなければならぬ。

これは相当に難しい。

圧倒的な実力を示すだけならば簡単だ。

誘き寄せ、策にハメ、翻弄し、四方を囲め、そうすれば簡単にコロコロが折れる。

だが、そうではなく、実力を見せつつ相手を叩き斬る事なく、導かれる一手を打っていく。

これは本当に難しい。

これをこなせるからこそ、佐為は稀代の打ち手で、最高の指導者だったのだ。

ヒカルはしばし考え、唐突に頷いた。

「うん。もともと欲張りだしな、全員だ」

顔あげ、ニカリと笑いながら相手に声をかける。

「よろしく。綺麗な一局にしような」

周囲でなにかザワメキが聞えるが、既にヒカルの耳には入らない。目を閉じ、そして開けばスイッチが切り替わる。

拡散していた思考が、一本の線のように細くなり、雑音が掻き消える。

盤を見通す目は1000手先、2000手先を予測していく。

思考の裏に盤を置き、その上を高速で白と黒が浮かんでは消えていく。

1000通りの勝ち筋、1000通りの勝ち筋。

それらがヒカルの頭の中で組み立てられ、分解され、さらに組み立てられる。それを更に振るいにつけ、さらに研鑽し、その中からより良い一手を組み合わせ、混ぜ合わせ、さらに煮詰める。

それらを更に一手を変えて別な筋を作り出す。

100か200か、あらゆる想定、限りない想像を纏めあげ。ヒカルは初めて一手を打ちこんだ。

パチリと、乾いた綺麗な音が、耳を振るわせた。

相手を務める海王の副将は初め怪訝に、しだいに困惑し、ついには慄く。

彼自身、対局者の棋譜は見た。

初戦と2回戦。圧倒的な差を見せ付けて勝利した無名の生徒。

大将も強かったが、副将のこの少年は、規格が違うのではないかと思うほどに、強かった

ただ、10手進み、20手進み、30手進む、40手を過ぎた頃には誰でも理解する。

ああ、全部読みきってるのか。

と。

それは進藤と呼ばれる生徒がノータイムで打つ事で疑問をもったり。

凡庸な一手を絶妙な妙手に変える様を見て納得したり。

さまざまだが、全てを読み切り、全てを想定しつつ、感情の機微すら読んで打たれている。そう思ってしまうほどに、絶妙な布陣を展開してくるのだ。

2局しか見ていないが、

とてもじゃないが、中学生には見えない。

それだけに気合を入れて試合に臨んだ。

途中気の抜けるやり取りや風景があつたが、開始の合図で思考を切り替えた。

はずなのだが、5分。相手は微動だにしなかった。

碁石に触れようとせず、ただ俯いて考え事をしているだけだつた。

不思議と苛立ちはなかった。

顔をあげ、声をかけられても、声には出さなかったが、内心で「そつだな」と返すほどに余裕、と言つのも違つが、不思議なゆとりがあつた。

もつとも初めて20分。

そんなゆとりは消え去つた。

初めは定石通りに展開していたのだが、途中から妙な違和感が付き纏つていた。

大体30手を超えた頃だろうか。

相手がほぼノータイムで打ってくる事に戸惑いは無い。
想定内だからだ。

だが、何故自分まで、さほど時間を空けずに打っているのか。

相手に触発されたのではない。

自分は冷静だし、進藤自身、ノータイムながらもユツタリと感じる打ち方をしている。

自分は考えて、相手の流れに身を任せないように自戒している。

はずなのに。

自分は打つべき場所が解る。

まるで、そこが最善の一手なのだ、初めから知っているように自然に短時間で思いつき、打てる。

有り得ない と思った

自分の力は中学生の中では頭一つ飛びぬけている自負はある。

だが、だが、今自分が打っている一手は、今までの自分では思いつかないような、そんな一手であり、まるでこれでは、進藤ヒカルに引きずられるように自分が高められているような、そんな……

そこまで考えて、手が震えた。

思わず碁石を床に取り落としてしまう。

カチン、と碁石が床に当る。

カラカラと転がる音を聞きつつも、進藤ヒカルを凝視した。

「んな……馬鹿な」

思わず声が漏れる。

進藤は真剣な表情で盤面を睨みつけている。

何秒経過したのか、進藤は首を捻って顔を上げた。

視線が交差する。

進藤は鋭い視線を緩め、困ったように眉を歪めて、盤面に視線をもどした。

口の中が一瞬で乾燥した。
理解した。

引きずられているのではなく、手を引かれている。

更なる高みに。

何故かは解らないが泣きそうになった。
叫びそうになった。

これは、感動しているのだろうか。
それとも戦慄しているのだろうか。

いや、どちらでもいいか。

盤面に目を落とし、震える手で石を打った。

勝てる気はしない。

でも、これが俺の打てる生涯最高の一局だろうな。

不思議と悔しさは無なかった

かわりに湧き上がるような熱と、清々しい、例えようも無い何かを感じた。

加賀は頭をさげ「ありません」と告げた。海王に対する評価を上方修正し、筒井の様子を見に向かう。ハッキリ言つてヒカルに対する心配は欠片もしていなかった。負ける所を想像できないし、単純に強いから。あとは、進藤と言う名前にちよつとした拒否反応が出かけているからだ。ほとんどが佐為の所為ではあるのだが。ともあれ、加賀は筒井の様子をみる。

ふむ。こりゃ負けかね。

筒井にしては上出来だな。

加賀はそう評価する。ジリジリと粘つてはいるが、残念ながらこのまま行けば負けだろう。

どこかで相手がポカすれば解らないが、まあ、無いだろう。

次いでヒカルの様子をみようとする視線を転じて目を向いた。

塔矢じゃねーか。

そしてその表情を見て、驚いた。

怖いほど真剣に、哀れなほど悔しそうに、叫びだしそうなほどの歓喜を乗せて。

塔矢アキラはヒカルの碁を見つめていた。

加賀も気になり、盤面に目を落とす。

「これは……」

一言で表すなら、異常。

言葉を増やしてもいいのなら、綺麗な碁。

スルスルと棋譜が自分の中で出来上がる。
すでに終盤、もはや完成形が加賀の中で形を得ていく。
と言うか、すでに全ての人の中で出来上がっているだろう。
ヒカルが一手打つたびに出来上がっていく棋譜。
相手の一手を待たずとも解ってしまう回答。

そして海王の生徒が一手を打つ。

加賀が想定した場所と同じ所に。
次も同じ、次も、そのまた次も。

ゾツとした。

指導碁ではない。

棋譜並べでもない。

なのに、少なくとも加賀と対局相手は同じ場所に打ち続けている。
つまりは、そうなるようにヒカルが誘導しているのだ。

どうやってなどと、加賀には皆目検討もつかない。

ただ、遙か高みにいる連中は皆こうなのかと、溜息をつく。
そう考えている内に終局のようだ。

対局者の生徒は、やり終えた事が満足なのか、フウと溜息をつき。
ヒカルに手を差し出す。
ヒカルは苦笑いしながらその手を取る。

「いや、上手いな。どうなったのか解んねえけど。まあ、ありが

とう。最高だった」

「こつちこそ、ありがと。正直、あんま自信なかったんだよな、あんたのおかげで最高の一局になった」

言ってくれるぜ、と涙ながらに口元を歪める生徒は、とても清々しい顔をしていた。

そして、審判が声をあげる。

「勝者、海王中！！」

そこで初めてヒカルは周りに気をそらした。

「うえっ！？ 負けた？」

背後に振り返りながらのヒカルの言葉。

問われた二人の反応は

「あ。筒井やつぱ負けたのか」

「うん。ごめん」

そんな感じだった。

もつともアツサリした加賀にくらべ、筒井は泣きそうだし、落ち込んでいるしでかなり責任を感じているようだった。

しゃーないかー。とヒカルは呟く。

そこでちょんちょんと肩を突かれ、ヒカルは振り返る。

そこには、満面の笑みを浮かべた佐為がいた。

ヒカルは思わず息を飲んだ。

つい思考が停止してしまったヒカルに、次の佐為の行動を止める事は出来なかった。

佐為はあらん限りの力でヒカルに抱きつき、ヒカルを中心にクルクルと回り始めた。

と言うか、ヒカルをぶん回そうとして回せなく、仕方ないから自分が回る！！ みたいなノリであった。

「うわ、うわっと、ちょ、何だよ彩っ」

混乱したヒカルの声に反応したのか、佐為は回転をやめ。

ヒカルの顔を覗き込んで、また笑う。

「素晴らしいです」

と、小さな声で伝えて。

それを聞いたヒカルは、少し照れながら言う。

「……誰の弟子だと思ってんだ」

それを聞いた差為は思わず「私の弟子です！！」と叫びたい衝動に駆られた。

しかし、そこは流石に自重し、その変わりに少し離れていたアカリの手を引つ張って、一緒に回った。「わ。ちよつと彩ちゃん！！ わわ、わああ、あつ、ヒ、ヒカル、ごめん。彩ちゃんが落ち着くまで我慢して」いや、好きなだけ戯れてくれていいぜ。とヒカルは返して、三人でクルクルとダンスのように回る。

いつの間にかヒカルの背後から負ぶさる様に佐為が、その正面に佐為と手を繋ぎ真っ赤になったアカリが、そして中心にアカリと向き合うようにヒカルが。

なんとも言い難い難い視線が向かうが、3人は気にした風もなくクルクルと。

と言っても佐為が暴走しているだけなのだが。

そんな中に声が届いた。

「……素晴らしい…一局だった」

ポツリと思わず呟いてしまったかのような、すこし寂しさを感じる呟きだった。

その場にいる全員が目がその声の元に集中した。

そこに居たのは、おかつぱ頭の少年。

「ああ、確かに」

それに釣られるように、少し呆れながら加賀が賞賛する。

「君を、いや、君達を超えなければ、神の一手には届かないのだからね」

どこか寂しそくに、けれど嬉しそくに笑って塔矢アキラは語りかける。

ヒカル達は、と言うか佐為はその声を聞いてようやく暴走を治めた。もっとも表情は緩みきっていてニコニコとしているのだが。

ともかく、ヒカルはアカリに佐為を託してアキラに話しかけた。

「さあ、それはわかんねえけど。でもさ、神の一手ってなんだ？」

「……………え？」

アキラは言葉に詰った。

と言うより、聞かれた事の意味が解らなかった。

「お前が求める神の一手ってなんだ？」

「……………」

アキラは答えられなかった。

アキラ自身、明確な方針をもってそれを目指しているわけではない。

ただ、高みを目指せば、いつか解る。そう言う類の物だと思っていたのだ。だからこそ、アキラは絶句した。

ヒカルは次にアカリに聞いた。

「神の一手って何だと思う？」と。

アカリは困ったように笑う、じゃれつく佐為を撫でながら、少し間を空けて、こう答えた。

「よく解んないけど、神様の一手なんだから人が打つ必要はないんじゃないかな？」

アキラは目を剥き、ヒカルは感嘆した。

コイツたまにすげー。と。

ヒカルが長年考え続けて出した答え、それを一瞬で言われた。

ヒカルが出した結論は、神の一手は要らない。と言う物だ。

便宜上「神の一手」と旧アキラと言い合っていたが、実際は

違う。

二人は「神の一局」を求めた。

その答えは先ほどの暮を見れば薄々とはあるが解るだろう。ヒントを出して見ると暮は二人で打つ物だと言う事。

「ま、こう言う意見もある」

ヒカルはアキラに向き直り、そう言い放つ。

「……………」

アキラは驚きの表情のまま、絶句。

ヒカルはそのまま、話を続ける。

「本当にソレが欲しいならちゃんと考えた方がいいぜ。漠然と求めるなんて、ちよつと効率が悪いからな」

そう言い放つてヒカルは「帰ろうか」と皆を促す。

葉瀬の二人は「そうだね」「だな」と頷きながら帰り支度を初め。ヒカルと佐為、アカリ組はすでにアカリが荷物を纏めているので問題なかった。

なにやら様々な視線が集まる中、5人は堂々と会場から退室していく。

その後、ぎこちない動作で表彰式を始める。

そこにアキラの姿はなかった。

その後、安心していた状態から復帰したアキラはすぐに後を追いかけて、
問いかけた。

「君達はソレがなんであるか知っているのか」と。

答えは簡単明瞭だった。

「知らねーよ」「知らないですねー」「あ、あの、私はよく解らないかな」

ヒカル・佐為・アカリであった。

葉瀬組はあまり興味のある内容ではないので参加していない。

「なら君達は何故、暮を打つんだ」

そんなアキラの問いに答えるのはヒカル。

「俺の暮見てたる？ あれで少しは解るはずだ。後は自分で考えてくれよ」

「ヒカル、暮会場に寄って帰りましょう」

「形くらい装ってやれよ……」

「あ、彩ちゃん……その、真剣に聞いてあげようよ」

アカリの言葉に顔を和らげ、佐為は小さな声でアカリに答えた。

「心配なんてしてませんから」

ヒカルのセリフはこの思いを知っているからこそその言葉だった。アキラに対する絶対の信頼はヒカルも変わらないのだが、それでも興味を示されていないと感じる事はバネにもなるが、傷つける刃にもなる。

この辺の配慮は今やヒカルの方が上だった。

ともあれ、その言葉を最期に5人は駅に向かって歩いていく。
アカリは佐為と腕組して、佐為はヒカルの隣を、ヒカルは佐為と
アカリの隣を。

仲の良い3人組は常に健在だった。

それを見送るアキラは心中複雑だった。
というより荒れ狂っていた。

「僕は、どこへ行きたいんだろう」

漏れ出る言葉にも、苦悩の色が見え隠れする。
悩める少年の出す答えは、まだ誰も知らない。

8話・海王中(了) (後書き)

なんか微妙な内容かも。。。

すみません、風邪っつかインフルエンザなのか、治まっつては発病を繰り返してます。

取りあえず自宅で出来る仕事は回してもらってるんですが。風邪の一進一退で自分の体のポンコツ具合がヒドイ。

ちなみに感想なんですけど、感想返しが出来そうにありません。なんかあのページ開くとリリースするんですよ……。調子がいい時なら20秒ほどで読み込むんですが、どうなっつてんだウチのPC……感想は一括で見れるがあるので、そちらから覗いてます。

あと、デスクノートですが、原文は保管してあるのでこれとゼロ魔が終つて気がのれば書きます。

てか、いつ終るんだ自分。。。死にたい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0202f/>

碁神の作り方(ヒカルの碁)

2010年10月9日02時34分発行